

PLAN INTERNATIONAL

GIRLS GET EQUAL

FREE TO BE ONLINE?

Girls' and young women's experiences of online harassment

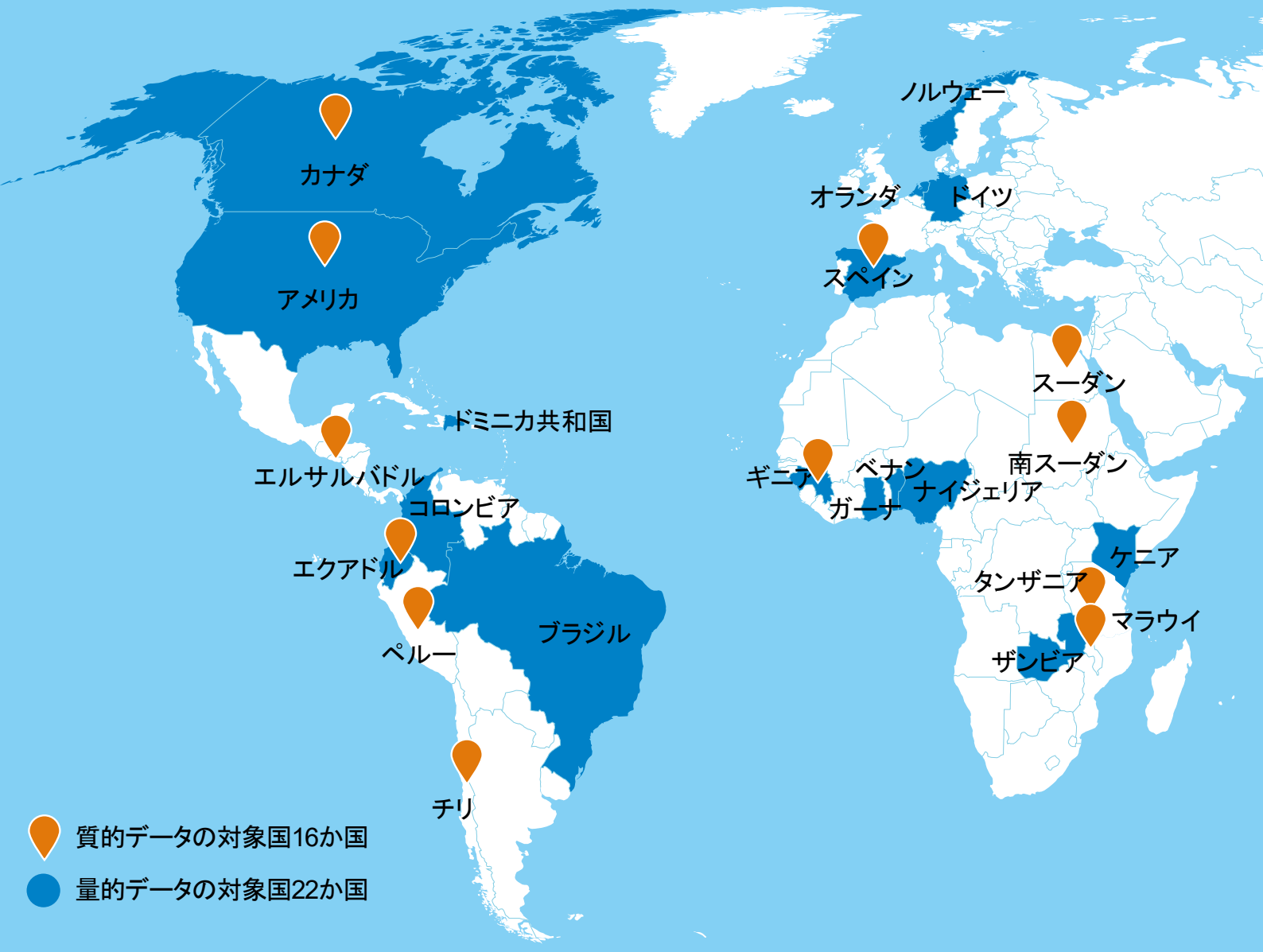
女の子にオンライン上の自由を

女の子と若年女性が経験している
オンライン・ハラスメントの実態

世界ガールズ・
レポート
2020

女の子に
オンライン上の自由を

本調査の対象国



世界ガールズ・レポート

プラン・インターナショナルは、2007年に初めて「世界ガールズ・レポート」を発表した。ソーシャルメディア・プラットフォームというオンライン上での女の子たちの経験について調査した2020年のレポートは、今後毎年、特定の環境またはセクターで女の子の自由と機会を制限する行動、態度、信念について調査していく新シリーズの第3弾となる。



目次

序文 5
南スーダンResilience Organisation常任理事
Kevin Abal

まえがき 6
プラン・インターナショナルCEO、AB Albrectsen

主な調査結果 7

はじめに 6

調査方法 8

状況説明 10

イコール・メジャーズ2030
(ジェンダー平等の進捗を測る指標) 13
ジェンダー平等とインターネットアクセス

私たちが学んだこと 14
1.ソーシャルメディアの重要性 14
2.オンライン上でジェンダーに基づくハラスメントを受けた経験 16
「あなたは一人ではない」
特集: 活動家 Hannah Al-Rashid 24
3.加害者像 26
4. ハラスメントが女の子と若年女性に与える影響 28
「信頼できる人に相談する」
特集: 2019ミス・ドミニカ共和国 Clauvid Daly 34
5. 女の子だから:ストリートから
ソーシャルメディア上まで広がるハラスメント 38
6. 変化をもたらす 40

プログラムと実践 44

結論 48

提言 50

謝辞

何よりもまず、オンライン・ハラスメントに関する経験を私たちに共有してくれた思春期の女の子と若年女性たちに感謝したい。特に、質的調査に参加し、自身の体験を語ってくれたカナダ、チリ、インドネシア、マラウイ、ネパール、フィリピン、南スーダン、スーダン、タンザニア、アメリカ、ギニア、ペルー、エルサルバドル、スペイン、エクアドル、ミャンマーの調査参加者と、多くの質問に答えてくれた調査対象国22カ国の女の子と若年女性1万4,000人に感謝する。貴重な時間を使って自身の考えを伝えてくれた彼女たちに感謝の意を表したい。

特に、以下に対して謝意を表する:

レポートチーム: Sharon Goulds（編集長兼レポート作成者）、Miriam Gauer、Aisling Corr、Jacqui Gallinetti（オリジナル研究レポート作成者）。

プラン・インターナショナル編集委員会: Miriam Gauer（調査マネージャー兼レポート・プロジェクト・マネージャー）、Jacqui Gallinetti（調査・知識・マネジメント・ディレクター）、Danny Plunkett,（コンテンツ＆クリエイティブチーフ）、Sarah Carson（キャンペーンチーフ）、Lorraine Ní Annracháin（キャンペーン・マネージャー）、Davinder Kumar（グローバルメディア＆広報チーフ）、Aisling Corr,（調査官）。

その他の寄稿者：本報告書の作成に協力してくれた Kevin Abalo、Clauvid Daly、Hannah Al-Rashid、キャンペーンコンサルタントとして協力してくれた、Glitchの創設者でエグゼクティブ・ディレクターのSeyi Akiwowo、グローバルハブのPhilip Gonzalo TaylorとNaomi Williamsに感謝の意を示す。また、プログラムのケーススタディを提供してくれたプラン・インターナショナルの各事務所、特にプラン・インターナショナル・オーストラリアのSophie ShuggとPasanna Mutha-Merennege、プラン・インターナショナル・フィリピンのRyan LanderとErnesto Almoceraに感謝する。また、調査に協力してくれたWomen of Uganda Net (WOUGNET)のPeace Oliver 、そして最後に、イコール・メジャーズ 2030のAlbert Motivansの尽力に感謝を述べる。

プラン・インターナショナル：コミュニケーション・チーフのCarla Jones、グローバル・インフルエンス＆パートナーシップ担当エグゼクティブ・ディレクターのSean Maguire、調査マネージャーのLucia Rost、政策・アドボカシーアシスタントのHannah Johns、ジェンダー、包摂、調査・学習アシスタントのHelen Merrick。

各国事務所および国内組織のチーム：回答者らが質的調査に参加するよう働きかけ、場合によってはインタビューを実施したプラン・インターナショナルの各事務所のスタッフに感謝する。

調査担当：Kantar Public、Ipsos Public Affairs

デザイン: Sandra Dudley

写真クレジット

カバー: Plan International
p.6: Plan International / Jesper Milner Henriksen
p.23: Plan International
p.24: Hannah Al-Rashid
p.34: Clauvid Daly
p.37: Plan International
p.39: Plan International / Quinn Neely
p.47: Plan International / G. Van Buggenhout
p.53: Plan International

イラスト: Plan International / Freepik

序文

Kevin Abaloは、南スーダンのResilience Organisationの常任理事である。同団体は2017年にコミュニティ支援機関として設立され、旧中央・東エクアトリア州（2015年以降は9州に再分割）に暮らす子どもたちへの暴力撲滅に向けたキャンペーンを行っている。同団体は、プラン・インターナショナルの「Girls Get Equal」キャンペーン（プランがグローバルに展開しているジェンダー平等を訴えるキャンペーン）と連携し、表現の自由や南スーダンの女の子の教育など、女の子の権利に関する意識啓発に取り組んでいる。

RESILIENCE
Community Support Agency

オンライン・ハラスメントに関する本報告書は、非常に深刻な問題に取り組んでいる。今や、テクノロジーの利用は世界を支配し、インターネットが大きな役割を果たしている。しかし、オンライン上の虐待、ハラスメント、ヘイトにより、ソーシャルメディアは誤った方向に進みつつある。このハラスメントには、性的な、わいせつな画像（セクストーション：恋愛関係にある相手から言葉巧みに性的な画像、映像、メールを入手して、それをネタにして相手に金銭を強要する行為）、殺害の脅し、なりすましなどがあり、数え上げればきりがない。

にの流れを止めるのは難しく、発展途上国では簡単に通報することもできない。街中やオンライン上でのハラスメントに耐えられず、つい罵倒を返してしまったり、加害者をブロックしようとすることもある。南スーダンで私たちは、この問題に対する意識啓発と行動に向けたキャンペーンを行うために学校内外にクラブを立ち上げ、ラジオでのトークショーや、歌やドラマを使って活動している。南スーダンでは、オンライン・ハラスメントを罰する法律はない。地域により事情は異なるかもしれないが、本報告書のためにプランが実施した調査では、こうした実態はどこも大差ないようだ。

今日、私たちは無防備である。あらゆるものがオンラインでどこでも手に入る。慎重に扱うべき個人情報がさまざまなウェブサイトに掲載されれば、コントロールするのは難しくなり、女の子と若年女性は標的にされやすくなる。ソーシャルメディア上でだれもが画像や最新情報を共有できれば、状況は一層悪くなる。画像を容易に加工し、意のままに扱って攻撃できるようになる。

重要なのは、自分自身を守る後押しをすることであり、Resilience Organisationでは、女の子と若年女性が自らを守る支援にも取り組んでいるパスワードやストレージの使用に関する意識喚起、安全といえない関係でパスワードを共有しないこと、アカウントごとに異なるユーザー名を作成すること、個人情報を見つけやすい場所から削除することなど。だれもが攻撃対象になるため、自身のアイデンティティを守るためには十分な注意を払うことが必要である。

個人でできることは限られている。私たちは、政府やテクノロジー企業に保護策を講じさせ、変化に向けて運動を起こさなければならない。女の子と若年女性は、ハラスメントに嫌気が差してインターネットを正しく活用すれば得られるあらゆる機会を逃している場合もある。これは人権の問題なのである。

まえがき



AB Albrectsen
プラン・インターナショナル CEO

「何かを投稿しようとするたびに、私の中に恐怖が生まれる。女の子はみんな同じ恐怖を感じていると思う」

17歳、エクアドル

今年の世界ガールズ・レポートのテーマは「オンライン上の自由」だが、実はその反対であることが明らかになった。オンライン上で自由に自分を表現する力を与えられるどころか、女の子はあまりにも頻繁にハラスメントを受け、虐待され、オンライン空間から追い出されているのだ。COVID-19によるコミュニティのロックダウンで、7億人近い女の子たちが学校に通えないなか、彼女たちはこれまで以上に多くの時間を自宅やインターネットで過ごしている。ウイルスの拡散を防ぐために社会の重要な機能がオンラインに移行されつつあるなか、ソーシャルメディアとウェブが本来提供すべき機会に女の子たちが完全かつ平等にアクセスできる重要性は、かつてないほど高まっている。

この報告書の調査は、複数の大陸にまたがる31カ国に暮らす1万4,000人超の女の子たちとの対話を通して行われたが、彼女たちの話に共通するのがハラスメントと差別だ。国籍、人種的アイデンティティ、教育レベル、障害、性的・ジェンダー的アイデンティティをめぐる他の虐待が重なり合うことで差別はさらに深刻化する。活動家たち（ジェンダー平等を求めて活動する女の子、若年女性、LGBTIQ+の若者を含む）は、特に悪意を持って標的にされ、生活と家族を脅かされることも少なくない。女の子たちは心を蝕まれるほどのハラスメントによって、上げるべき声を失いつつある。

持続可能な開発目標(SDGs)では、ジェンダー不平等に取り組むために、インターネットにだれもがアクセスできることなど、ICTの活用を呼びかけている。発展途上国ではモバイルテクノロジー市場が拡大中で、インターネットへのアクセスも急速に増加しているが、オンライン上のジェンダーに基づく暴力から女の子を守るための強固な対策はないままである。問題の規模や性質を明らかにするためのデータは誰も集めておらず、ウェブサイトやソーシャルメディア・プラットフォームの報告メカニズムは多くの場合、不十分で効果的でない。すべての女の子がインターネットにアクセスできるわけではなく、私たちは誰も取り残されないよう、ジェンダーによる情報格差を解消し、すべての人のアクセスを確保しなければならない。しかし、私たちはそれだけで終わるわけにはいかない。今こそ、テクノロジー企業と政府が、オンライン上の虐待の加害者に対して厳格に対処すべき時である。

女の子は変化を求めており、変化を起こすことはできる。この報告書とプラン・インターナショナルの「Girls Get Equal」キャンペーンを通して、この問題が人々の心の最前線に届き、草の根や女の子・女性主導の市民社会組織が長年この分野で行ってきた素晴らしい活動を基に前進していくことを願う。女の子の日々の現実に耳を傾け、理解することで、ソーシャルメディア企業、政府、市民社会が行動を起こすきっかけになることを願っている。

主な調査結果

- 世界各地にいる調査対象者のうち、半数以上の女の子がオンライン上でハラスメントと虐待を受けたことがある。
- オンライン上で虐待を受けた女の子の4人に1人が、身の危険を感じている。
- オンライン上の虐待が、女の子たちの声を奪いつつある。

女の子は単に女の子であるというだけでハラスメントを受け、関心のある問題について発言すれば状況はさらに悪化する。人種、セクシュアリティ、障害も標的になる。どこにいても安全を感じられず、家の中までも付きまとって心と体を蝕んでいくオンライン・ハラスメントは、肉体的・精神的な恐怖という点ではストリートハラスメントとまったく同じだ。どちらの根底にも、女の子と女性たちは「決まった居場所」にいればよいという女性差別があり、その境目はなくなっている。

匿名で何の規制も受けずに加害者側がレイプや身体的暴力をすると脅し、罵倒や性差別的な言葉を使い、加工した画像を投稿し、ポルノ写真を送り付けることができる一方で、女の子たちは多くが恐怖を感じ、投稿を控え始め、自分自身を守る行動をせざるを得なくなるのだ。

今こそ、これを止める時である。女の子と若年女性たちは変化を求めている彼女たちの経験は「普通なこと」ではなく、街中であれば犯罪になるような行動をオンライン上では我慢しなくてはならないことなど、あってはならない。政府もソーシャルメディア企業も行動を起こさなければならない。

政府と社会全体がこの虐待を厳しく監視する必要があり、ソーシャルメディア企業は、その技術力と資金力を活かして、女の子と若年女性のオンライン上の自由を課題の中心に据える必要がある。

ソーシャルメディア企業は

- **ジェンダーに基づく暴力を対象とした、効果的でクセスしやすい通報メカニズムを構築すること**
- **加害者の責任を追及すること**
- **交差性のある女の子のアイデンティティを受け入れ、問題の規模と大きさを追跡するために細分化されたデータを収集すること**
- **この問題に真剣に取り組むこと**

「ソーシャルメディアは、声を上げ情報を共有できる素晴らしい場所になりうるものですが、頭のおかしい人が匿名で誹謗中傷できる恐ろしい場所にもなりうるのです」

22歳、チリ

警告：本報告書には、性暴力や虐待に関する記述が含まれている。

はじめに

今年のプランの年次報告書**世界ガールズ・レポート**は、31カ国に暮らす1万4,000人超の女の子と若年女性を対象に実施した調査に基づいている。その目的は、ソーシャルメディア・プラットフォームで女の子と若年女性たちがオンライン上で受けている経験を明らかにし、理解することである：どんなプラットフォームを利用しているか、なぜ利用するのか、どんなハラスメントを受けているか、ハラスメントの加害者はだれか、ハラスメントは彼女たちに、そしてソーシャルメディア・プラットフォームの継続的な利用にどんな影響を与えているのか。

2018年の「世界ガールズ・レポート-Unsafe in the City」は、まったく異なる5つの都市で実施された調査に基づいたもので、そこには女の子たちが経験するストリートハラスメントの蔓延する恐怖の実態が記録されている。それから2年、焦点はオンライン・ハラスメントに移ったが、その内容はほとんど変わらない。対面でのハラスメントではないかもしれないが、心に侵入して攻撃を加え、しばしば恐怖に陥れ、同様の方法で女の子たちの自由を奪う。

若くて女性であるというだけで、女の子はオンライン上で標的にされ、積極的に政治的な発言をしたり、障害者や、黒人、LGBTIQ+だと名乗ったりすると、状況はさらに悪化する。ハラスメントは、意見を侮辱されたり、暴力で脅されたり、望まないポルノ画像を大量に送り付けられたりと、多岐にわたる。ストリートハラスメントのように、絶え間なく続き、精神的に傷つけられることも多く、実際の身体的危害につながることがある。

オンライン上のジェンダーに基づくハラスメントには多くの定義があるが、今回の調査では、以下のものを使用した。「性自認あるいはジェンダー・アイデンティティに基づいた、あるいは有害なジェンダー規範を強制することによって、一人または複数の人々が他者を傷つける行為」。
この行為は、インターネットと/あるいはモバイルテクノロジーを使って行われ、ストーカー行為、いじめ、ジェンダーに基づくハラスメント、中傷、ヘイトスピーチ、搾取、ジェンダーに基づくトローリング（荒らし：オンライン上の人々の会話を荒らす行為）が含まれる[1]。

調査に参加したすべての女の子と若年女性にとって、ソーシャルメディアは生活の重要な一部となっている。彼女たちは活動、娯楽、教育、友人や家族との連絡のために利用している。

「実際、最近はソーシャルメディアがものすごく重要で、1日3〜4時間使い続けることもよくあります」

18歳、ネパール

「日常生活ではもちろん、（ソーシャルメディアは）友人や家族とのコミュニケーションや連絡にも欠かせない役割を担っています。」

年齢不詳、ミャンマー

COVID-19パンデミック下で、オンライン上の世界はますます重要性を増している。家庭で孤立しがちな人びとにとっては生命線であり、若者が教育で遅れを取らず、広い世界とつながり続けるうえで重要なツールになっている。

インターネットへのアクセス、そしてオンライン上での安全は、基本的に人権問題であり、ジェンダー平等の重要な指標となる。ソーシャルメディア・プラットフォームは、女の子と若年女性に議論の場、声を聴いてもらう機会を与えることができるが、彼女たちが意見を述べると脅されたり、侮辱されたりすることが増えている。女の子たちが街中で受ける女性差別と同様の経験をオンライン上で受けることが許されてはならない。ハラスメントを理由に、ソーシャルメディアが本来提供すべきあらゆる機会を活かす女の子と若年女性たちの能力が制限されてはならない。彼女たちの声、彼女たちが関心を寄せる問題が虐待によって抑え込まれ、自由な活動を妨げられ、システム上でのいじめによって自信を失わされる恐れがある。こうした実状が事実として認められることはなく、プラットフォームもハラスメントの加害者も責任を問われないのが実態である。

（オンライン上は）誰のスペースで、どんな自由があるのか。

言論の自由は、ウェブやソーシャルメディア・プラットフォームを規制するさいにもっとも考慮すべき事項としてよく引き合いに出される。オンライン環境につきものの誤報、虐待、ハラスメントに対して、誰も責任を問われないということが起こりがちだ。オフラインでは法の裁きを受けるはずの加害者が、オンライン上では何の罰も受けず、匿名性にものを言わせるようになる。

自由とは複雑なものだ：誰の権利が優先され、誰の声が封じられるのか。私たちをつなぎ、私たちに情報を提供するため、私たち全員のために設計されたシステムは、すでに強力な力を持つ者のためのプラットフォーム、そしてWorld Wide Webの創設者の言葉を借りれば「人間に敵対する」力になる危険がある[2]。

> 「ウェブはみんなのものであり、団結してそれを変える力が私たちにはあります。それは簡単なことではないでしょう。しかし、少しの夢を持ち続けて力を尽くせば、私たちが望むウェブの世界を手に入れることができるのです」[3]
>
> **World Wide Webの創始者**
> **Tim Berners-Lee**

2017年、インターネット上のヘイトスピーチやハラスメント、フェイクニュースの増加により、ドイツでは「ソーシャルネットワークにおける法の執行を改善するための法律」、通称「NetzDG」法が採択された。
これは、Twitter、Reddit、Facebookなどのソーシャルメディア・プラットフォームに対し、ヘイトスピーチやその他の物議を醸す、あるいは攻撃的なコンテンツを24時間以内に削除するよう求めるものだ。禁止されたコンテンツの削除を怠ると、最高で5,000万ユーロの罰金が科される。したがって、ソーシャルメディア・プラットフォームはこれを遵守している。たとえば、Facebookはドイツに2つの削除センターを持ち、1200人の従業員を雇ってコンテンツを監視している[4]。

2020年6月[5]、ソーシャルメディア企業による説明責任を強化し、加害者に対する刑事規定も求めるために法律が改正された。この改正で、ソーシャルメディア企業は、24時間以内に投稿を削除することに加え、犯罪にあたるコンテンツをドイツ連邦刑事警察庁に通報することが義務付けられた。これは効果的な法律だが、言論の自由を制限しているという理由で、批判にさらされ議論の的になっている[6]。

調査方法

今年の報告書は、データ収集とデータ分析の2本柱で構成されている。量的データは22カ国で収集され、質的データは16カ国の若い女性活動家18人への詳細なインタビューから得られた。

1. 量的データ：データは、女の子のソーシャルメディアの利用状況、オンライン・ハラスメントの経験、オンライン・ハラスメントの影響、考えられる解決策について尋ねる16の質問からなるクローズド調査（イエス・ノー選択式）で収集された。この調査は、2つの調査会社が事前に準備した候補者から回答者を選び、オンラインとコンピューター支援による電話インタビューで実施された。回答者は15～25歳の女の子と若年女性である。

全体では、22カ国で14,071件のインタビューが行われた：オーストラリア、ベナン、ブラジル、カナダ、コロンビア、ドミニカ共和国、エクアドル、ドイツ、ガーナ、ギニア、インド、インドネシア、日本、ケニア、オランダ、ナイジェリア、ノルウェー、フィリピン、スペイン、タイ、アメリカ、ザンビア。

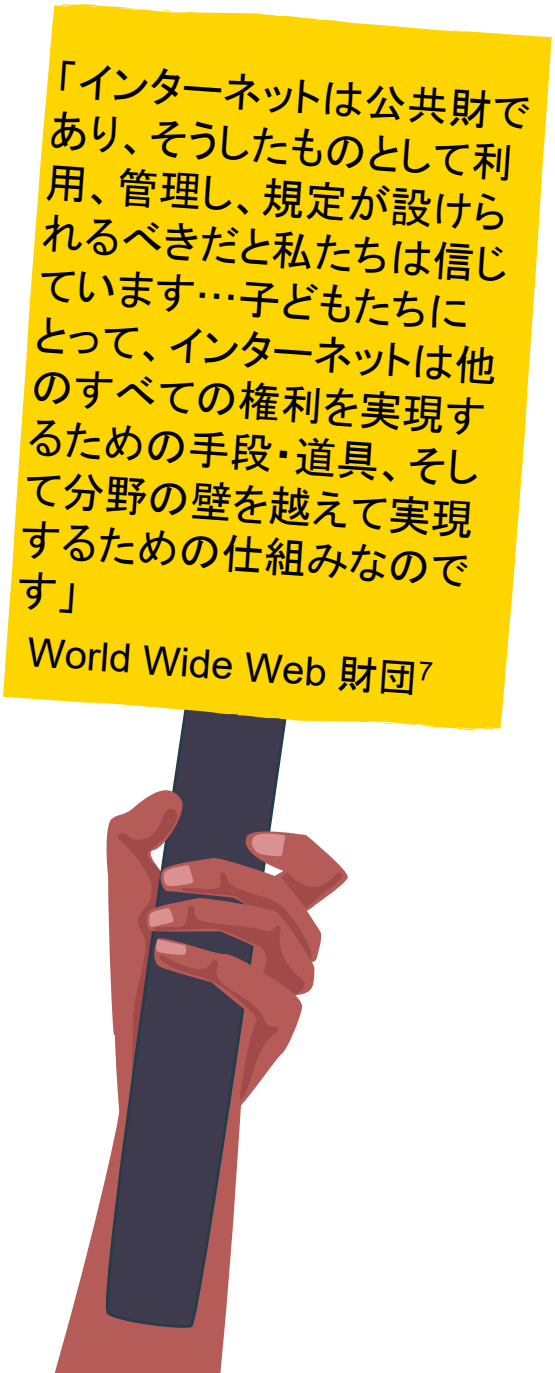
2. 質的データ：3～4月にかけての3週間、主要な情報提供者とのインタビュー（KII）を通じてデータを収集した。インタビューは35～60分で、SkypeとWhatsAppの通話で行われた。アンケートは4つのセクションに分けられ、それぞれ4～6問の質問があり、量的調査と同じ見出しで構成された。詳しく調査できるよう、すべての質問は自由形式とし、女の子たちが心地よいと感じる範囲で多くの情報が引き出せるものにした。

インタビューは、交差性を踏まえて多様な若い女性活動家グループを対象に行われた。世界16カ国の15～24歳の女の子計18人にインタビューが行われた：カナダ、チリ、エクアドル、エルサルバドル、ギニア、インドネシア、マラウイ、ミャンマー、ネパール、ペルー、フィリピン、南スーダン、スペイン、スーダン、タンザニア、アメリカ。

モラルとセーフガーディング・ルールに従い、プラン職員2名が質的インタビューを実施した。事前に情報シートが渡され、18歳未満の女の子の場合はインタビュー前にインフォームド・コンセントと同意を、また、インタビューの録音についても、口頭で同意を得た。データ収集、分析、執筆のプロセスを通じて、匿名性と機密性が確保された。

主な使用言語は、英語であり、次いでスペイン語、フランス語であった。

状況説明



インターネット利用は増加の一途をたどり、ソーシャルメディア・プラットフォームによって私たちが他とつながる方法はとめどなく増え続けている。未来のデジタル化は確実だ。2019年は歴史的に重要な年だった：世界の半数がすでにオンラインで参加するようになっていたなか、World Wide Webは30周年を迎え、接続デバイスは推定217億台、1秒間にインターネット上で送信されるデータは推定74,500GB超に達した[8]。2020年4月現在、インターネットユーザーは45.7億人、ソーシャルメディアユーザーは37.6億人となり、世界のオンライン普及率は59%に達している。このような世界的な増加にもかかわらず、アクセスに問題のある国は多く、インターネット普及率がもっとも低い10カ国のうち9カ国がアフリカにある[9]。地域的には、北欧が人口に対するインターネット普及率95%で1位となっている。世界でもっともインターネット普及率が高い国は、UAE、デンマーク、韓国である[10]。

World Wide Webは、1989年に国連子どもの権利条約が採択されてから2年後、女性に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約が採択されてから丸12年後に初めてページを公開した。女の子と若年女性を保護する2つの人権の枠組みは、彼女たちの基本的な権利を保護し、生活のあらゆる側面への参加を可能にするものだが、起草されたのは、まだオンライン世界が生まれる以前だった。この2つの条約は、その適用範囲を十分に広くし、ほとんどの状況に当てはまるように起草されたとはいえ、国際人権コミュニティが事実上後追いする形となった[11]。国連子どもの権利条約が「子どもの権利とデジタルメディアに関する一般討論の日」を開催した2014年にはすでに、明らかにデジタルメディアにおける子どもの権利に何らかの対処をすべき状態になっていた。

人権に関する法律や政策が確実に社会の変化に対応していくための定期的な監視から、子どもたちがデジタルスキルを身に着けるための支援に至るまで、多くの提言がされたなかに、**「女の子に対するあらゆる形の差別を効果的に撤廃するための努力を強化し、女の子のテクノロジーへのアクセスと利用を制限するジェンダー・ステレオタイプと社会規範に対処するために、啓発プログラムなどを行う」**[12] 必要性を認めたものがあった。

女の子の権利とジェンダー差別の問題が認識されていたのは明らかだが、2014年時点では安全よりもアクセスに議論が集中した。しかし、2017年に女性差別撤廃委員会（CEDAW)が一般勧告を採択し、ジェンダーに基づく暴力は**「インターネットとデジタル空間で起こる現代の暴力形態など、テクノロジーを介した環境」を含む「人間関係のすべての空間と領域」**で起こることを認識し、進展があった[13]。一般勧告は明確に女の子に言及し、発生場所にかかわらず、あらゆる形態のジェンダーに基づく暴力を犯罪とし、制裁を行うことを国家に要求している。特に、女性と女の子が持つ身体的・性的・精神的不可侵性（人権が侵されないこと）[14]を侵害するジェンダーに基づく暴力を挙げるとともに、ジェンダーに基づく暴力を受けた被害者らが司法にアクセスできることを保証している[15]。

残念ながら、こうした取り組みは、各国レベルでは、オンライン・ハラスメントの対象となる女の子と若年女性に焦点を絞った適切な救済措置には至っていない。インターネットの規制を目的とした法律のほとんどは、取引、金融、電子商取引に関する事項を対象としている。ハラスメントに取り組もうとする法律があっても、その多くは時代遅れで有効性がない[16]。

女の子と女性に対するオンライン上の暴力とは?

ブロードバンド委員会の定義する女の子と女性に対するオンライン上の暴力には、ヘイトスピーチ、個人的な通信のハッキングと傍受、個人情報の窃盗、オンライン上のストーカー行為、言葉による脅迫が含まれる[17]。同委員会は、攻撃対象者に人生を終わらせようと決心させること（自殺推奨や大量虐殺の唱道）や人身取引や性売買など女の子と女性に対する他の形態の暴力を促すことも必然的に含まれるとしている。また、トローリング、ネット上のいじめ、嫌がらせ、リベンジポルノ、セクスティング（携帯電話のショートメッセージサービスなどを利用して自分の裸体を撮った写真などの性的な画像やメッセージをやり取りする行為）などの行為も含まれる[18]。オンライン上の虐待は、その数多くのすべての形態において、女の子と女性に対してのみ行われるものでないことは明らかだ。しかし、ジェンダー不平等が続く世界では、女の子と女性が特に攻撃対象になりやすい。

- **World Wide Web財団と世界ガールガイド・ガールスカウト協会**が2020年にオンライン上の虐待とハラスメントについて若者の経験に関する調査を世界規模で実施した。この調査によると、女の子と若年女性の52%が、脅迫メッセージ、セクシャルハラスメント、同意のない私的画像の共有など、オンライン上で虐待を経験していること、全回答者の64%がハラスメント、虐待、暴力を経験した人を知っていること、そして若者の一番の関心事は私的な画像、ビデオ、メッセージが同意なく共有できることであることが判明し、30%はそれがもっとも心配だと回答した[19]。
- **アムネスティ・インターナショナル**は、Twitter上で行われた女性に対する暴力と虐待の規模、性質、影響など、ソーシャルメディア・プラットフォームにおける女性の体験について、特にイギリスとアメリカに焦点を当てた質的・量的調査を実施した。

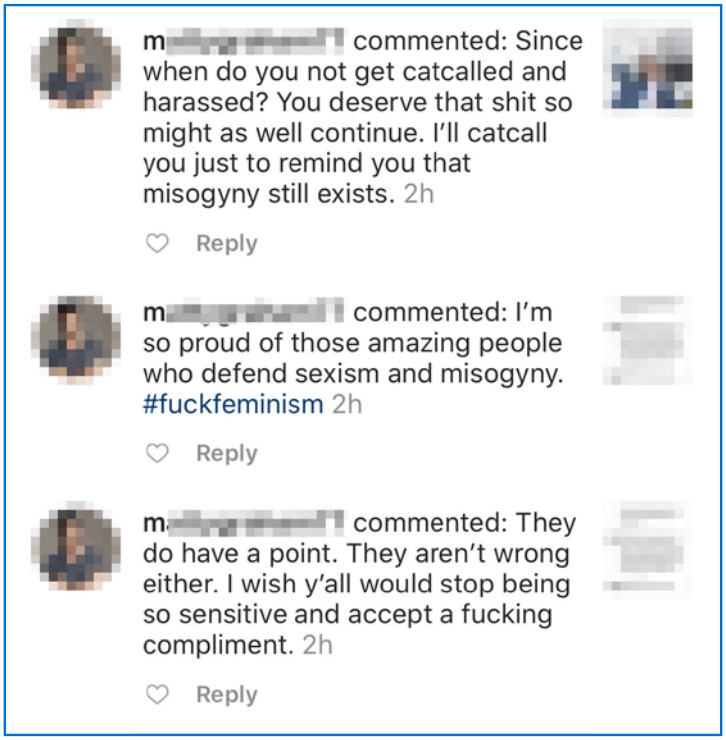
虐待の性質としては、身体的あるいは性的暴力を振るうとの直接的あるいは間接的な脅し、女性のアイデンティティの1つまたは複数の側面に対する差別的虐待、標的を定めたハラスメント、ドクシング（他人の個人情報をインターネット上にさらす行為）[20]や女性の同意なしに女性の性的または親密 な画像を共有するなどのプライバシー侵害があることが明らかになった[21]。

- 今なお続く**女性差別について2018年に行われた調査**では、女性に対するオンライン・ハラスメントの例が数多く挙げられている。30歳未満のオーストラリア人女性の76%がオンライン・ハラスメントを受けたことがあると報告され、アメリカでは、オンライン上の深刻なセクシャルハラスメントやストーカー行為は若年女性が標的になることがきわめて多い。また、パキスタンでは、女性へのオンライン・ハラスメントは「パキスタン女性の日常生活の一部として一般に受け入れられている」。伝統的なメディアは、オンライン・ハラスメントを拡大させたり、その火付け役になることさえある。2016年夏、女性だけの主演キャストによる映画『ゴーストバスターズ』の新版が公開されたさい、唯一の黒人主演キャストが、ポルノ、脅迫、人種差別的なメッセージで荒らしによるハラスメントを受けて、一時的にTwitterから離れざるを得なかった[22]。

2015年に**ブロードバンド委員会**が発表した調査では、女の子と女性に対するオンライン・ハラスメントの蔓延を示すために、多くの研究を参照している。18～24歳の女性は、オンライン上であらゆる種類の暴力にさらされるリスクが高く、「ストーカー行為やセクシュアル・ハラスメントを経験する可能性が群を抜いて高い」と指摘されている。

これを明確に示すためにEUの調査結果に言及しており、15歳以上の女性の18%すなわち約900万人が深刻なオンライン上の暴力を経験しているという[23]。

ソーシャルメディア・プラットフォームは、投稿されたコンテンを所有しておらず、それに対して責任を感じていないが、責任を持つべきだという声が高まっている[24]。有害コンテンの管理は難しいかもしれないが、不可能なことではなく[25]、プラットフォームを所有する企業は、これを行うための経済力と技術的スキルの両方を有している。



特に女の子と若年女性の脆弱性は、これまで十分に注目されてこなかった問題だ。オンライン上には多くの機会がある：多くの若者にとって、オンラインでつながることは生活の一部であり、彼らのウェルビーイング（幸せ）を高める力がある。しかし同時に、若者たちは、自己肯定感や全体的な幸福感、ソーシャルメディアが本来提供すべき機会を活かす能力に対する悪影響もあると回答している[26]。オンライン・ハラスメントについては、誰がなぜ標的にされ、加害者は誰か、虐待の性質は何か、そして重要なことは、それが女の子たちに及ぼす影響は何かなど、まだ理解すべきことがたくさんある。

今年の**世界ガールズ・レポート**は、人権とジェンダー平等の実現という文脈で、これらの問いについて考察している。本報告書は、女の子と若年女性の経験に焦点を当て、それぞれの語るストーリーを通して彼女たちの声を広く伝え、その解決策に耳を傾けるものである。

イコール・メジャーズ2030 ジェンダー平等とインターネットアクセス

ジェンダー平等に向けた歩みを加速させるために2016年にセクターを越えたパートナーグループによって結成された、「イコール・メジャーズ2030」は、女の子と女性たちの運動、支持者、意思決定者が使いやすいデータと証拠を持てるようにすることで2030年までのSDGs達成と誰一人取り残さないための取り組みを導くものだ。

https://www.equalmeasures2030.org/

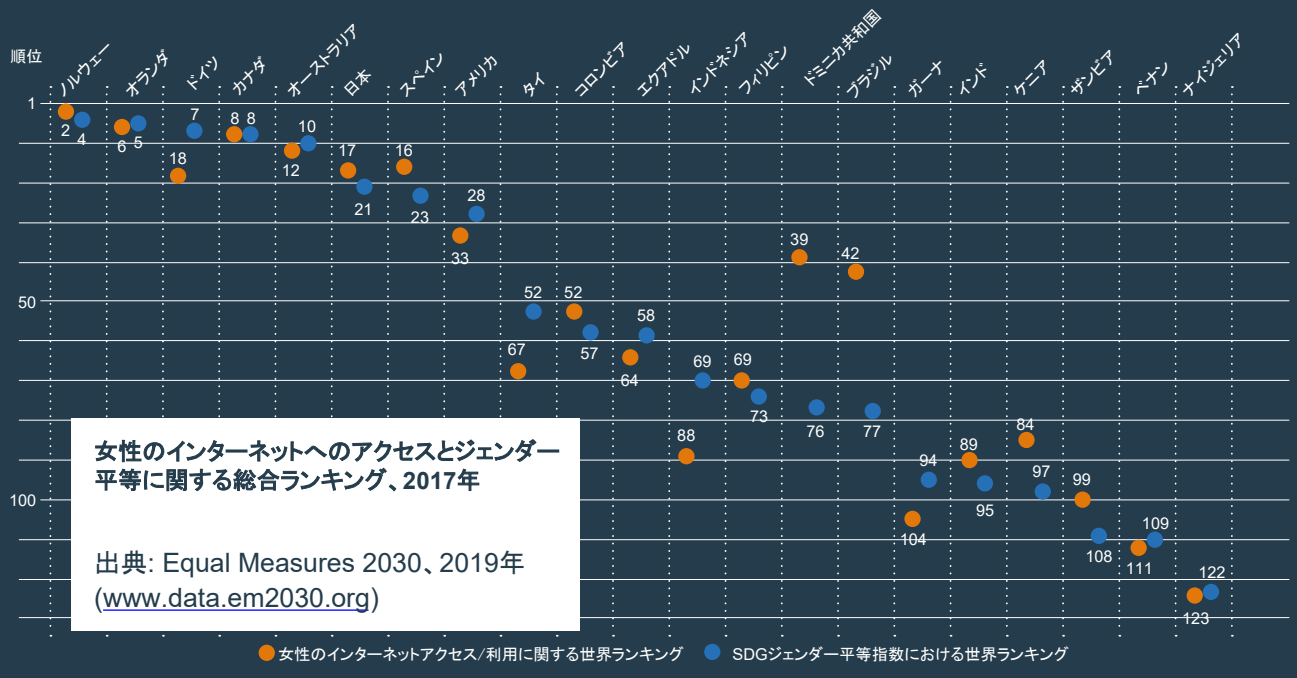
オンライン・ハラスメントを理解するうえで重要な、女の子と女性の地位について、調査対象国22か国の示す状況は実にさまざまだ。例えば、以下のグラフは、SDGsジェンダー平等指数でもっとも高いスコアを持つノルウェー（4位）やオランダ（5位）から、ベナンやナイジェリア（それぞれ109位、122位）のようにかなり低いランクにある国まで、ジェンダー平等に関する世界的評価基準に照らした際の違いを浮き彫りにしている[27]。

しかし、女性のインターネットへのアクセス/利用の普及率という点では、順位が著しく異なる国もある。ブラジル、ドミニカ共和国はジェンダー平等については世界76位だが、女性のインターネットアクセス・利用では39位、ケニアは女性のインターネットアクセスについて、ジェンダー平等に関する総合順位から想像されるよりも高いアクセス率を達成していることがわかる。

また、ドイツ、アメリカ、タイ、インドネシアなど、女性のインターネット利用率が低い国もあり、ジェンダー平等に関する総合ランキングより順位が下がっている。この順位は女性のインターネット利用についてだが、他のデータでは、インターネットアクセスにおけるジェンダー格差は、インド、ベナン、ギニア、ガーナ、ナイジェリアでもっとも大きいことがわかる[28]。

女性のインターネット利用率がもっとも高い国々では、思春期の若者の割合が徐々に増加し、安定している。たとえば、ノルウェーとオランダでは、全人口の95%超が過去3カ月間にインターネットを利用している[29]。こうした国々では、ほとんどの国民がインターネットとソーシャルメディアにアクセス・利用していることで、ソーシャルメディアの利用に潜むリスクを回避するための女の子と若年女性を対象にした指導が、公式・非公式問わず進んでいると考えられる。

一方、女性のインターネット利用率が低い国では、女の子と若年女性がオンラインの世界を体験する可能性は一層低くなる。インターネットの利用が急速に拡大する一方で、一部の国ではまだ非常に限られている。2018年の国別調査によると、過去12カ月間にインターネットを利用した15～19歳と20～29歳の割合は、ベナンの6%と9%という低い値から、ナイジェリアの14%と20%、ギニアの19%と22%と幅があった。多くの女の子と若年女性にとって、インターネットとソーシャルメディアの利用は、未知の領域なのである。



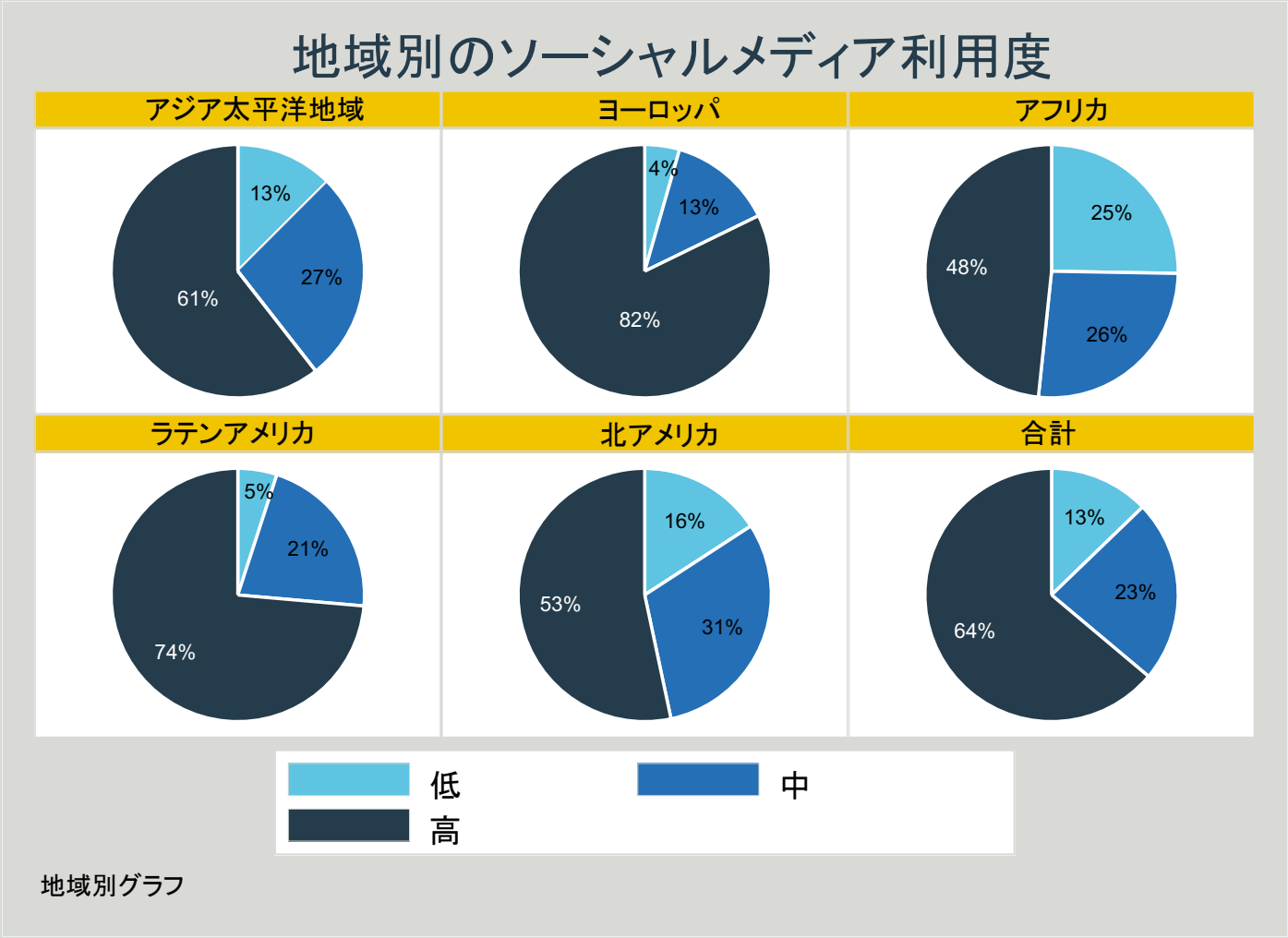
女性のインターネットへのアクセスとジェンダー平等に関する総合ランキング、2017年

出典: Equal Measures 2030、2019年 (www.data.em2030.org)

私たちが学んだこと

1. ソーシャルメディアの重要性

調査対象の22カ国の女の子と若年女性に、ソーシャルメディアの利用状況について質問した。98%がソーシャルメディアを利用し、74%が頻繁に、または非常に頻繁に投稿し、64%が他のユーザーのソーシャルメディアへの投稿に頻繁に、または非常に頻繁にコメントしている。調査対象国全体では、女の子と若年女性の64%がソーシャルメディアの利用度が高い、23%が中程度、13%が低いに分類することができる。



地域別グラフ

ソーシャルメディアの利用頻度は、15歳の女の子でもっとも高く（72%）、25歳の女性で最も低い（57%）。女の子と若年女性にとってソーシャルメディアが重要であり、オンライン上で過ごす時間が長いことは、質的インタビュー参加者のコメントでも明らかで、ソーシャルメディアが生活の一部であることを誰もが認めている。重要である理由は、友人との連絡、家族とのコミュニケーション、仕事の機会、情報の拡散と取得、最新ニュースの取得、幅広い人々との交流、オンラインコミュニティの構築など、さまざまだ。

「正直なところ、私にとって非常に重要な存在です。私はこうしたアプリを誰もが知り、若い人たちの間でとても流行っている時代に育ったのです。でも、私は一日のほとんどをオンラインで過ごしていると思う…日常的に何時間も使っているんです。」

20歳、スーダン

KIIの回答者は全員活動家で、気候変動からジェンダーに基づく暴力、女性のエンパワーメントに至るまで、自分にとって重要だが意見の分かれることの多い問題についてソーシャルメディアを使って発言している。

「文章や写真を載せたり、他の人の記事を共有したりしています。また、自分の興味のある話題には、時々、コメントをしています。」

17歳、エクアドル

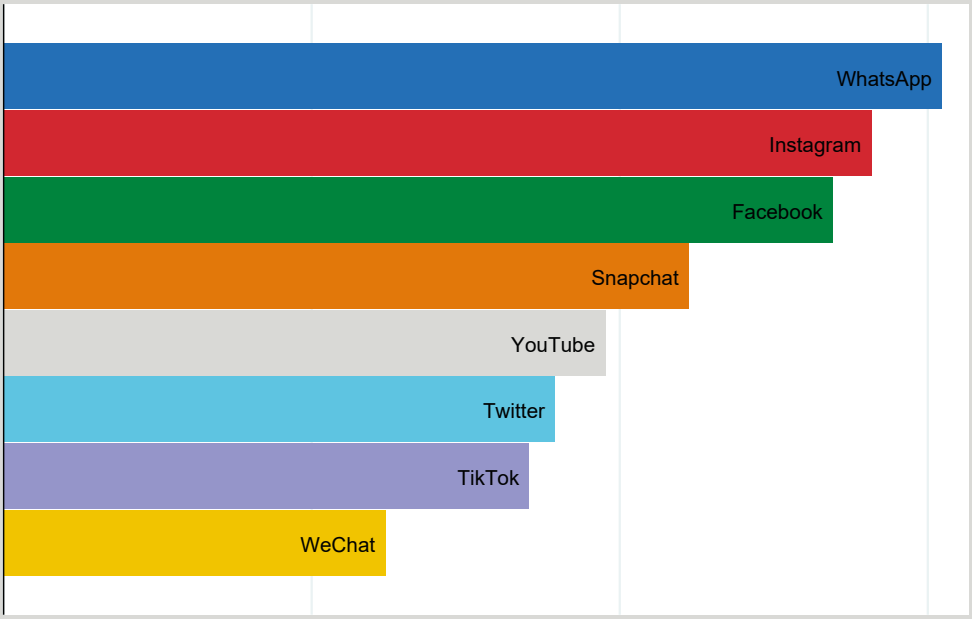
「私は、自分が勉強したことに沿って、重要な日や政治的な局面に応じたテーマで短い記事を書いています。子どもと女性に対するレイプの深刻なニュースを共有することが多いです。」

24歳、ペルー

全調査対象国22か国でほとんどの女の子が利用しているオンラインツールとプラットフォームは、WhatsApp（60%）、Instagram（59%）、Facebook（53%）である。

利用するプラットフォームは年齢によって異なる：WhatsAppは、すべての年代でもっとも頻繁に使用されているメッセージングプラットフォームの1つだが、若年女性は、Instagramを好む思春期の女の子よりもFacebookを頻繁に使用している。また、思春期の女の子は、若年女性よりもSnapchatや人気上昇中のTikTokを格段によく利用する。こうしたプラットフォームのすべてが誰もがアクセスできる公のチャットスペースではなく、たとえば、WhatsAppは限定された人のみとメッセージを共有できるサービスだが、Facebook、TikTok、Instagramはかなりオープンな交流ができ、見知らぬ加害者からハラスメントを受けるリスクが高い。

全調査対象国22か国で15～25歳の女の子と若年女性がもっとも頻繁に利用しているソーシャルメディア・プラットフォーム



2. オンライン上でジェンダーに基づくハラスメントを受けた経験

「友達しか画像を見られないように設定しているのですが、知らない人から、お尻を見せないと私の写真をアップロードする、というメッセージが来ました。その人は今でも誰だかわからないけど、私しか持っていない写真や、私がいた場所の写真を送ってきて…親と兄に話しました。怖くて、怖くて、何かを投稿しようとするたびに恐怖が襲ってくる。女の子はみんなその恐怖を感じていると思います。」

17歳、エクアドル

調査対象22カ国すべてにおいて、**58%**の女の子が、ソーシャルメディア・プラットフォーム上で何らかのオンライン・ハラスメントを個人的に経験したことがあると回答しており、KIIの参加者**18人中15人**がそれを裏付けている。

地域差はわずかで、ヨーロッパでは63%の女の子がハラスメントを報告し、次いでラテンアメリカでは60%、アジア太平洋地域では58%、アフリカでは54%、北アメリカでは52%となっている。

女の子自身がジェンダーに基づくオンライン・ハラスメントを受けていない場合でも、回答者の大半は実際にハラスメントを受けた女の子や若年女性の知り合いがいると回答。I質的なインタビューでは、他人がオンライン・ハラスメントを受けているのを見た女の子たちは、自分の行動への影響について言及している:

「私自身はオンライン・ハラスメントを経験したことはありませんが、否定的なコメントや評価を受けることを恐れて、ソーシャルメディアに投稿したり、コメントをするのが怖くなることがあります。」

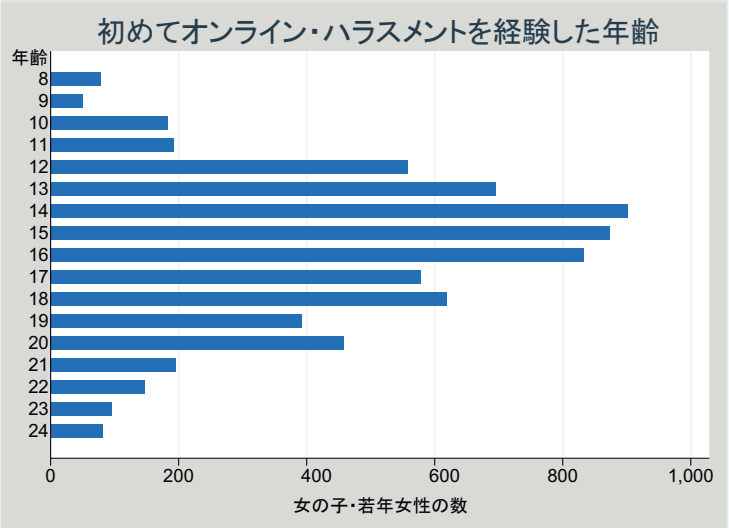
17歳、インドネシア

ほとんどの女の子が、ソーシャルメディア・ハラスメントを初めて経験したのは14～16歳の間だと答えている。そして、徐々に自分の身を守る術を身につけていく。ハラスメントの原因を、ハラスメントを行う側の責任ではなく、自分の未熟さのせいにしているのは、以下の若い女性だけではない:

「今、私は20歳になったばかりです。ハラスメントを一番受けたのは、9～14歳の頃だったでしょうか。その頃は私が未熟なためにハラスメントを受け、ほとんどのことにどう対応したらいいかわかりませんでした。そして、できるだけオープンにしようとしていたので、1日に7つ近くのソーシャルメディア・プラットフォームを使っていたことを覚えています。」

20歳、スーダン

女の子の年齢が低いほど、加害者の標的になりやすい。スーダンのある若い女性はこうコメントしている:
「もしかしたら、女の子の年齢が低い方が、(ハラスメントが)やりやすいのかもしれない」



女の子と若年女性の23%がInstagramで、14%がWhatsAppでハラスメントが発生していると回答しているが、特に安全でないと感じているのはFacebookだ：39%の女の子が、ハラスメントの経験を報告している。Facebookに対する警戒心は、質的インタビューにも表れていた。

「実は、最近は（笑）、Facebookをあまり見なくなったので、以前より慎重になったと言えます。悪いコメントや露骨なことを避けるために、（Facebookは）たまにしかしません。WhatsAppの方が安全だと思うので、WhatsAppを使って過ごしています。」

23歳、マラウイ

「Facebookでは多くの人を受け入れ、多くの人を削除しました。Instagramでは攻撃されたと感じることは少ないけれど、Facebookには暴力的なものを感じることが多いです。」

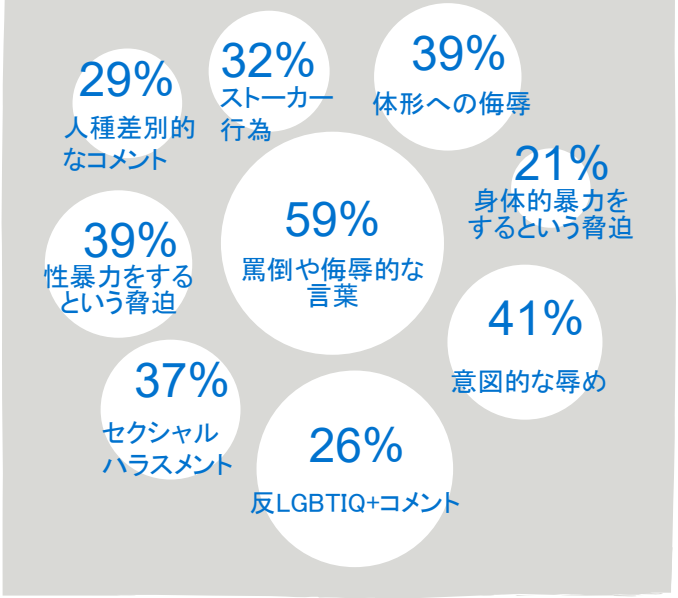
24歳、ペルー

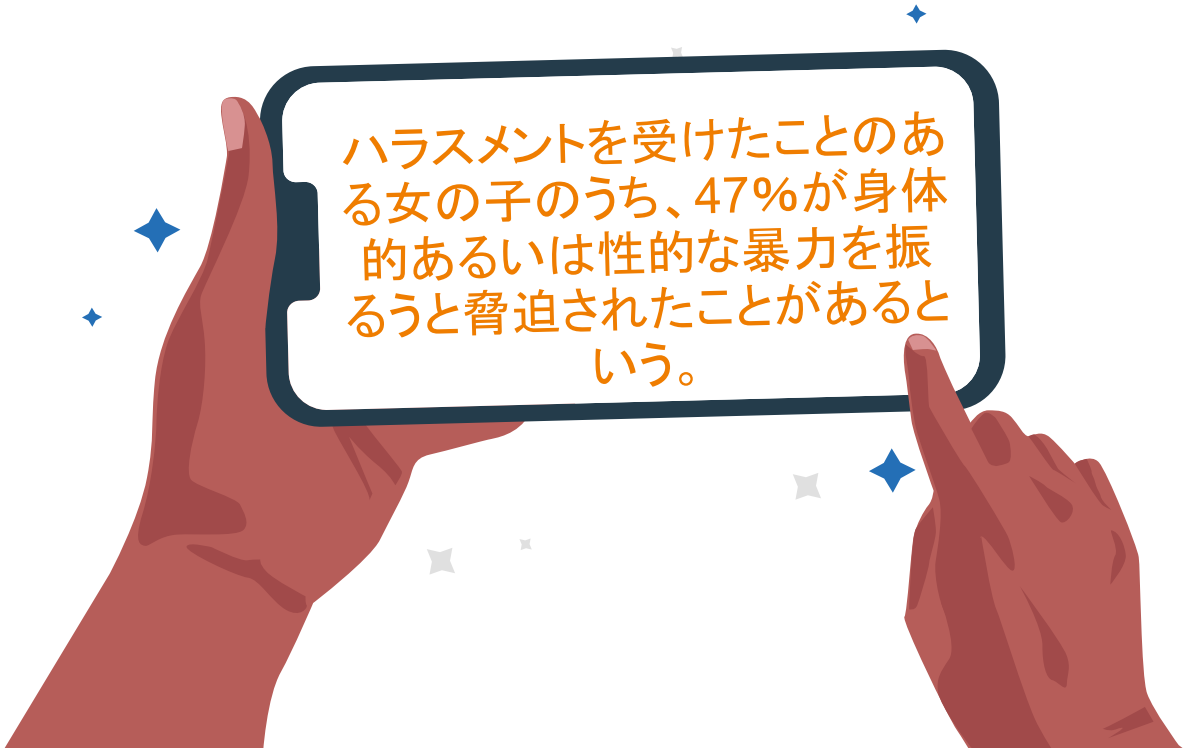
若年女性は、思春期の女の子よりも、ハラスメントが頻繁または非常に頻繁であると報告する傾向がある。これは、思春期の女の子の方が頻繁にソーシャルメディアを使用している事実に反するが、必ずしもハラスメントの頻度が低いということではなく、おそらく、何がハラスメントなのかが年上の女性たちに比べてわかっていないためかもしれない。

オンライン・ハラスメントの認知度は、年齢が上がるにつれて高まる：**15歳では、オンライン・ハラスメントについてよく耳にすると答えた割合が36%であるのに対し、24歳では43%である。**

ハラスメントには、身体的あるいは性的な暴力を振るうという脅しから人種差別的発言、ストーカー行為まで、さまざまな形がある。ハラスメントを報告した58%の女の子のうち、85%が複数の種類のハラスメントを経験したと答え、1種類しか経験したことがないという女の子はわずか17%、そして、9%の女の子が以下のグラフにあるすべての種類のハラスメントを経験しことがあると回答している。

女の子と若年女性が受けているさまざまな種類のハラスメントとその割合[30]





ハラスメントは、具体的に2つの区分に分類されると考えられる。

A. 女の子が単に女の子であり、**オンライン上である**という理由で受けるハラスメント。それは、投稿した内容とは無関係であり、女の子がソーシャルメディアを利用すればどこでも起こりうる。黒人や、LGBTIQ+あるいは障害者であることを明らかにすると、状況は深刻化する。

B. 女の子がオンライン上で積極的に発言していると、ハラスメントのレベルが高まる。**活動家は、その発言内容やその積極的な姿勢を理由に攻撃される。**ハラスメントをする側は、発言内容、女の子と若年女性が参加している議論、そして彼女たちが提起している問題に反応しているのだ。

A. オンライン上であること

オンライン上であるという理由だけでハラスメントを受ける女の子は、主に性的なハラスメントを受けたと回答している。

- 性的なコメントや露骨なメッセージを受けること（性の売買を持ちかけられることを含む）、
- 性的あるいは露骨な写真や画像を受け取ること、
- 自身の写真を送るよう要求されること(脅迫を含む)、
- コンテンツの無許可の共有、および/または女の子の個人情報を知っていることを示すこと。

「...私の身に起こったことは、ある男がソーシャルメディア上で私に関する情報をつかもうとしたとき、『どの通貨がいいか。ドルか、ユーロがいいのか。何が欲しいんだ。...あのね、たった一晩で、君の人生を変えるような大金をあげることができるんだ。この世界のすべてのお金を与えることだってできる。来て、ファックして！全部あげるよ』。そんなこと、想像できますか。ああ、とても嫌な気分になりましたよ。」

23歳、南スーダン

「若い頃のある出来事を覚えています...男の子たちからヌードを送るように頼まれたり、私が投稿した写真について、指示に従わなければ共有したり、変な風に編集してみんなに公開すると脅迫するメッセージがよく来ていました。あるいは、単純に悪口を言われることもありました。まだ若かったので、正直、本当に恐ろしかった。だから、ソーシャルメディアを使っていた9〜14歳の間は人生で最悪の時期でした。」

20歳、スーダン

また、質的インタビューに参加した若い女性たちも、性的な画像や生殖器の写真、ポルノ写真を送られたと語った。

「実際、私が何も投稿していなくても起こるの...男性は、女性を弄ぶことができるというような考えを持っていて、そういうことで、彼らは自分の露骨な写真を送り始める...男性が私に自分の裸の写真を送ってくるなんて、本当に気色悪い...彼らはただ受信トレーに送信するだけ:「ヘイ、ベイビー」って。そして私はメッセージを開いて、「一体何が起こっているの」とパニックになる...彼らは同意もなしに送り付けてくる、とにかく非常識です。」

23歳、マラウイ



女の子のソーシャルメディアでの経験の大部分に、女性を性的充足の道具と見る性的対象化があり、女の子の服装やオンライン上での見せ方が厳しく品定めされる。

特に、女の子と若年女性が行動規範を破ったとか、保守的な理想に背いたと判断された場合はなおさらである。

「ジェンダー平等について投稿したとき、素敵な写真を投稿したとき…多くの人がコメントし、中には『いつも投稿しているな』と罵る人もいます。『自分を売り込んでいるのか。男を捕まえるための宣伝か。ソーシャルメディアで体を売る売春婦！』と。」

23歳、南スーダン

「オンラインや公共の場でよくハラスメントを受けます。ソーシャルメディアに投稿すると毎回コメントし続ける人がいるので、不安を感じます。 髪を隠さないといけないとか、ロングドレスを着ないといけないとか。これでは自分自身のことを自由に表現できないと感じます。」

19歳、インドネシア

「私の友人（女性）はよくヘイトコメントを受け、彼女の投稿は、彼女がオンライン上に投稿したり共有したものに関係なく、他のグループチャットで話題になっていました。彼女は服装のせいで、またいつも化粧をしているせいで、攻撃されていたのです。」

17歳、フィリピン

私の同意なしに

コンテンツが無許可で共有されたり、女の子の個人情報を知っていることを明らかにすることを、インタビューした女の子と若年女性の41%が問題視していた。どちらもプライバシーの侵害であり、ハラスメントをする側が、女の子たちの住所や親族に関する情報を知っている場合もあった。カナダのある17歳は、他人が自分に関する情報を簡単に見つけて、付きまとうのは「本当に不気味」だとコメントしている。

また、見ず知らずの人に写真を勝手に使われる場合もある。

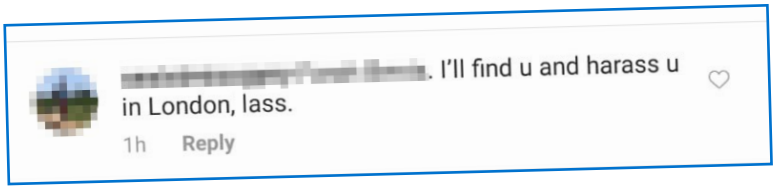
「私にとって、オンライン上のセクシャルハラスメントは誰かに自分のことをコメントされたり、写真などについてコメントされたりすることだけではありません。私の写真を共有したり、写真を私の同意なしに自分のプロフィールに使ったりする人もいて、そういうこともよくありました…ある男性が、私は知らない男性でしたが、自分のプロフィールに私の写真をどれもこれも載せ始めて、本当に驚きました。でも、彼は写真に写っている私がきれいだったからと言うんです。でも、これは誉め言葉ではなくセクシャルハラスメント、しかも非常に悪質なハラスメントだと思います。」

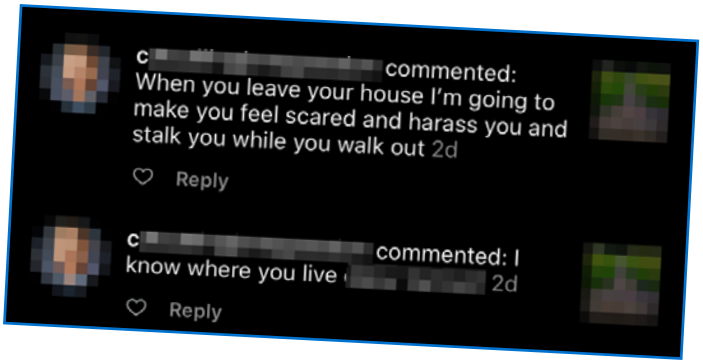
19歳、インドネシア

また、こうしたハラスメントが単発ではなく継続的に、もっと組織的・体系的に行われ、ハラスメントの行為者と被害者が複数に及ぶ例もあった。こうしたハラスメントには、ユーザーがオンライン上でストーカー行為をするために女性の画像を無作為に掲載する「アンダーグラウンドウェブページ」が関わっていた。

「去年だったか、恐ろしい事件がありました。どう説明したらいいのかわからないんだけど。ある男性が誰かのInstagramで見つけた写真をよく投稿していて、その男たちはその女性を調べてソーシャルメディア上にある彼女の情報を見つけようとしました。そして彼らは彼女の住所まで知っていました。とにかく規模が大きかったので多くの女性がハラスメントを受けました。メッセージや、ひどい画像を送ったり…私個人は狙われませんでしたが、知り合いの女性たちが標的にされました。当時は、都会でも地方でも、若い女性の多くが恐怖を感じていたのを覚えています。すべてをプライベートにする（限られたメンバーのみアクセス可能にすること）とか、ソーシャルメディア上の個人情報をすべて削除するとか、そんな恐怖感がありました。なぜなら、誰もが標的にされる可能性があるとわかったからです。」

22歳、チリ





この種のハラスメントは、オンライン上のハラスメントがオフラインでのハラスメントや暴力につながる点、そして組織的な、あるいはネットワーク化されたオンライン・ハラスメントの経験が増えれば、ソーシャルメディアユーザーの間に恐怖心が生まれる恐れがあり、被害の当事者だけでなく思春期の女の子と若年女性により広く影響を与える点で、特に恐ろしい。同時にこれは、より強固な安全メカニズムを導入する本格的な改革が必要なことを裏付けるものだ。

また女の子たちは、ハラスメントをする男性側が女の子に何らかの形で拒絶されたり、断られたりしたと感じると、その後オンライン上での攻撃がさらに激しく、あるいは悪質になると報告している。

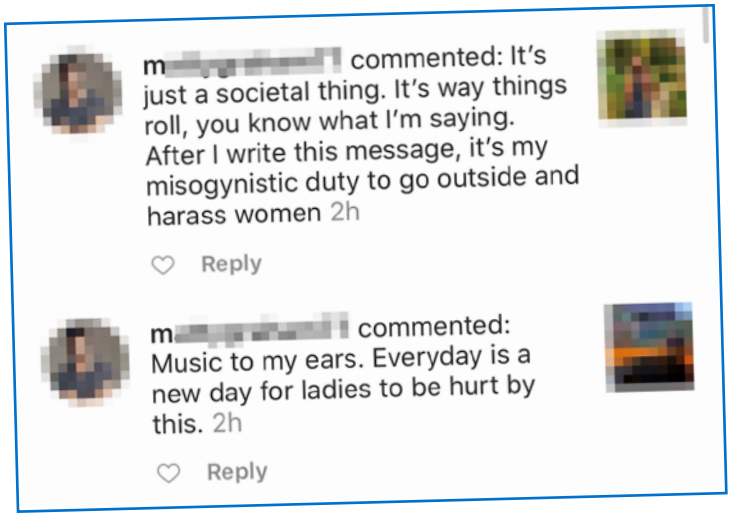
「デートして断ったら、ソーシャルメディアで悪口を言いふらされるんです。」

23歳、南スーダン

「私に付きまとっていた人のことがとても印象に残っています。『デートはしない』と伝えたらいきなりいろいろなハラスメントが始まったのです。ストリートハラスメントでは、断られた後にエスカレートすることがよくあると思うし、実際いろいろなニュースにもなって見聞きしてきましたが、オンライン上もオフラインと同様、拒絶された後にエスカレートするパターンがあるように思います。誰かを力で支配するための一つの方法なのです。」

23歳、アメリカ

上記のストーカー被害には、特に憂慮すべき点がある。この若い活動家は、デートを断った後、偽のアカウントで同じ活動家グループの一員になりすましたものも含む複数のソーシャルメディアアカウントを通じて、長期間にわたってハラスメントを受けた。彼女はその男をソーシャルメディアでブロックしたが、彼は彼女をしつこく追い回し、攻撃的なコメントを送り、彼女と彼女の家族に関する個人情報をつかんでいることを強調した。オンライン・ハラスントは、容易に身体的暴力に発展しかねない：特にこのケースでは、ハラスメントをする側が、彼女が企画し参加した対面式のイベントに参加することができたからだ。



人種、民族、障害、ジェンダー

女の子たちのオンライン上での経験を決定づけるのは、単に女の子であるという性差別だけではない。人種差別も、LGBTQ+あるいは障害者であることも、ハラスメントをする要因になる。外見、セクシュアリティ、民族性、人種あるいは障害など目立った特徴があれば、女の子と若年女性は一層執拗な攻撃を受けることになる。

「LGBTの友だちには、自分のセクシュアリティをオープンに表現したために、オフラインやオンライン上でハラスメントを受けている人がいます。」

17歳、フィリピン

- LGBTIQ+であると自認し、ハラスメントを受けた**女の子の42%**が、LGBTIQ+であることを理由にハラスメントを受けていると回答。
- 障害者であると自認し、ハラスメントを受けた**女の子の14%**が、障害があることを理由にハラスメントを受けていると回答。
- 少数民族の出身であると自認し、ハラスメントを受けた**女の子の37%**が、少数民族であることを理由にハラスメントを受けていると回答。

ある回答者は、**「人種について神経をとがらせている人は多い」と言った。そして「妙な話ですが…話をするようになっても、話題になることはなく…人種や…先住民の問題についてみんな話したがらないんです。私がそのことを話すと、必ず一人は『どうせ文句を言うんでしょ』と言うんです」。**

17歳、カナダ

思春期の女の子たちが受けるオンライン・ハラスメントを一括りにすることはできないが、女の子たちがオフラインの環境で交差性のあるさまざまな形で直面している虐待と差別との類似性がある。障害、人種、民族、LGBTIQ+であると認めることで、女の子と若年女性が単に若い女性であるというだけで受けるハラスメントがエスカレートするのは、すべての地域に共通している。

B. 活動家への攻撃

活動家たちは、特にフェミニストやジェンダー平等の問題をめぐって**注目と批判の的になっており**、そのことが女の子と若年女性たちからかなりの反発を招き、彼女たちの間でオンライン・ハラスメントについて議論する際の重要テーマになっている。**インタビュー回答者の47%が、自分の意見を理由に攻撃されたと回答**。攻撃の目的は、その問題に対する彼女たちの信頼性と知識を貶め、あるいは、女の子たちに特定の話題について話すべきではないと思わせて口封じをすることだと感じている。ソーシャルメディア上でも、オフラインと同様に、自分の立場をわきまえることが求められているのだ:

「私の友人が政治的な事柄についてコメントしたり、意見を述べたりすると、…少し視野が狭い人もいて、偽のアカウントを使って、『こんなことを言うのは誰だ』と、下品な言葉を使って、厳しいコメントをしがちです。…厳しい言葉で、『君はこれをやってはいけない、女の子だから、こういうことに首を突っ込むな』と。」

21歳、ミャンマー

ジェンダーやフェミニズムの問題について投稿するとコメントが集まると話す女の子たちもいて、ある子は、男女問わず、いろいろな人からコメントが来ると言う。フェミサイド（相手が女性であることを理由とした、男性による殺人）や女性に対する極端な暴力について投稿しているエクアドルのある17歳の女の子は、『きわめて偏狭な』人たちから『くだらないコメント』をたくさんもらうと報告している。

また、女性の中絶体験を共有するためのInstagramアカウントを運営する若い女性は、反応が残酷だと言う。

「言うまでもなく、その女性にとって非常につらい経験について話しているわけですから、胸が張り裂けそうになります。どれほどの苦しみを経験したかは、読めばわかります。なのに、こういう人たちは『恥を知れ』などと言うのです。どれほどの苦しみかも知らずに、どうしてコメントできるのでしょうか」

22歳、チリ

また、別の回答者は、反フェミニズム的なコメントには、宗教上のきわめて偏狭な考え方も強く感じると語った。

「…特に私はフェミニストだから、たくさんの人がコメントしてきますが…今年の2月に、ビーチで脚を少し出した写真を投稿したんだけど、ある女の子がこうコメントしてきたの、実は偽アカウントみたいだから、そのコメントが女性のものか男性のものか分からないんだけど。『あなたの体は神様のものだから、体を隠して、そんな服は着ないで』と言われて、親が地獄に落ちたらどうしよう、と恐怖を感じずにはいられませんでした。」

19歳、インドネシア

アメリカのある若い女性は、オンライン上で女性の実体験を共有することでストリートハラスメントに反対する活動をしているが、自分が受けた暴言は、加害者とみられることに反対する男性たちからの反応だと見ている。

「MeToo運動や今起こっていることすべてにおいて、標的にされていると感じている男性たちの反感を買うというパターンがあると思います。セクシャルハラスメントについて話しているなら、悪いのは男性だという話に違いないから、防御を固めなければならないと思っているのです…ハラスメントをしたいというのは、本当に守りに入っているところからきていると思います…そして、物事が変化し、人びとがそれについて発言していることに怒りを感じ、自身は重要でないと感じているのかもしれません。自分を守るために誰かを攻撃する気持ちが抑えられなくなっているんだと思います…世の中が変化するなかで、人々の発言に怒りを感じているということもあるだろうし、自分の存在意義が感じられなくなっているのかもしれません。女の子や女性の話ばかりだと、『自分はどうなんだろう、自分だって大変な人生を送っている』と感じているのかもしれません。あるいは、男性たちもこの問題に参加する権利があるはずなのに、男性の話は取り上げられないし、対象にもなっていないという、ある種の権利意識があるのかもしれません。」

23歳、アメリカ

ソーシャルメディアだけでなく

女の子たちはオンライン上で数多くのさまざまな経験をしているが、ソーシャルメディアでも、公共の場でも家庭でも、共通している点がある：それは静かで控えめな、ある特定の行動が女の子たちに期待されている点だ。少なくともハラスメントをする側にとっては、ジェンダー・ステレオタイプによってハラスメントは正当化され、女の子が許容範囲を超えた行動をしていると判断した場合に女の子を標的にすることができるようになる。

「この地域のコミュニティは保守的で、私たち女の子は礼儀正しく、女の子らしく振る舞うことが求められます。ソーシャルメディアを使っているときも、注意を払う必要があります。言いたいことを言ってはいけないし、特に女の子には多くを望みます…だから、オンライン上で平等を実現するには、コミュニティの考え方や意識も非常に重要なのです。」

21歳、ミャンマー

若年女性たちがオンライン上で受けるハラスメントには、男性優位に関する凝り固まった考えが「一緒くたになった」、より広い社会現象という面があると、彼女たちは強く意識している。

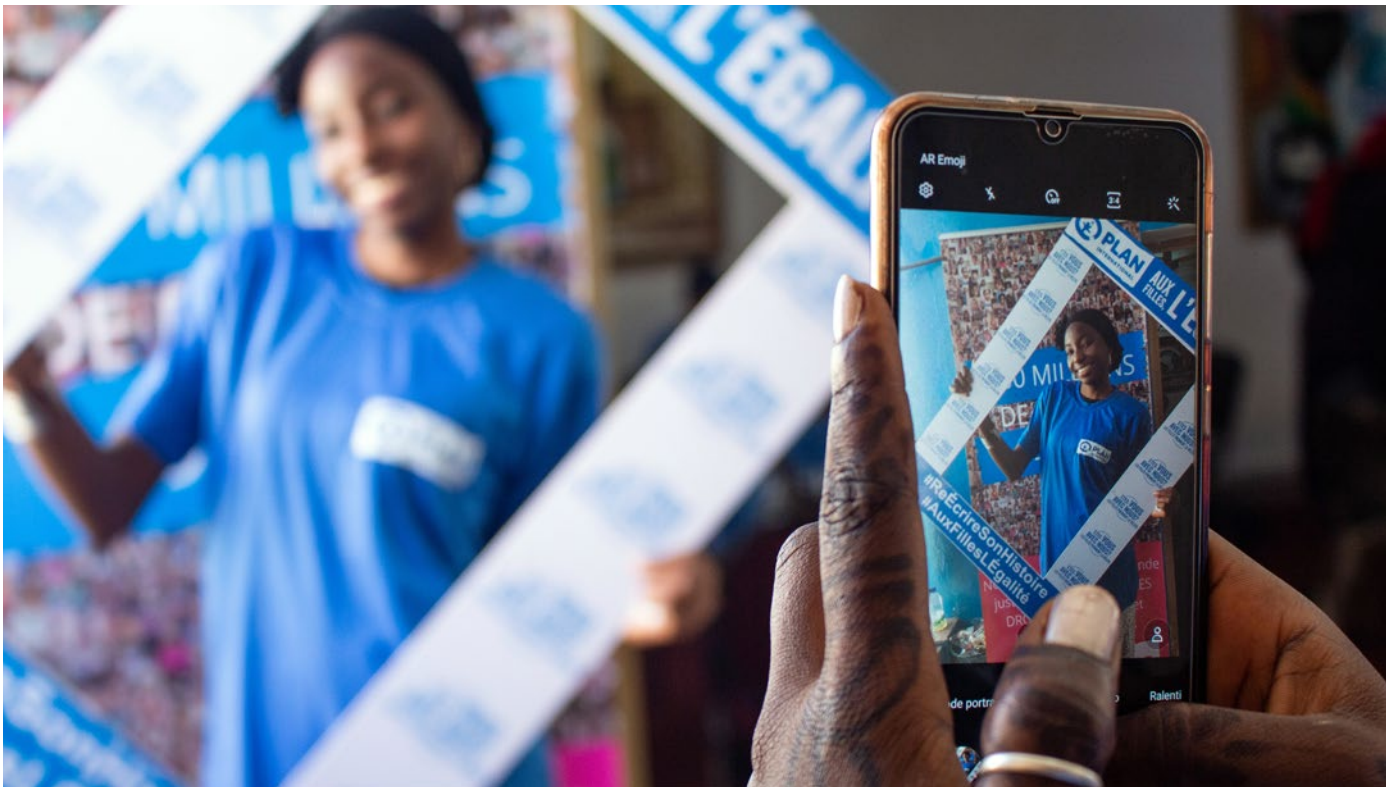
「それはある意味、文化とつながっていると思うことがあります。だって、ここの人たちは、常に男性が女性より優れていると教えられているようなものだから…ただ、ほとんどの場合、男性が稼ぎ手であり、男性は女性が決して稼ぎ手にはなれないと思っているんです。私はまだ若いから、たとえ学位を持っていても、男性に頼らなければならないということになるのかもしれません。だから、いろんなことがごちゃ混ぜになっていると思うのです…」

23歳、マラウイ

女の子と若年女性は、オンライン上は安全でないと感じることが多いが、加害者は違う。ソーシャルメディアに彼らを阻むものはない。そこは、身分を明かすことなく、因果関係を問われることもなく虐待することができる、ハラスメントをする側にとってきわめて安全な空間なのだ。

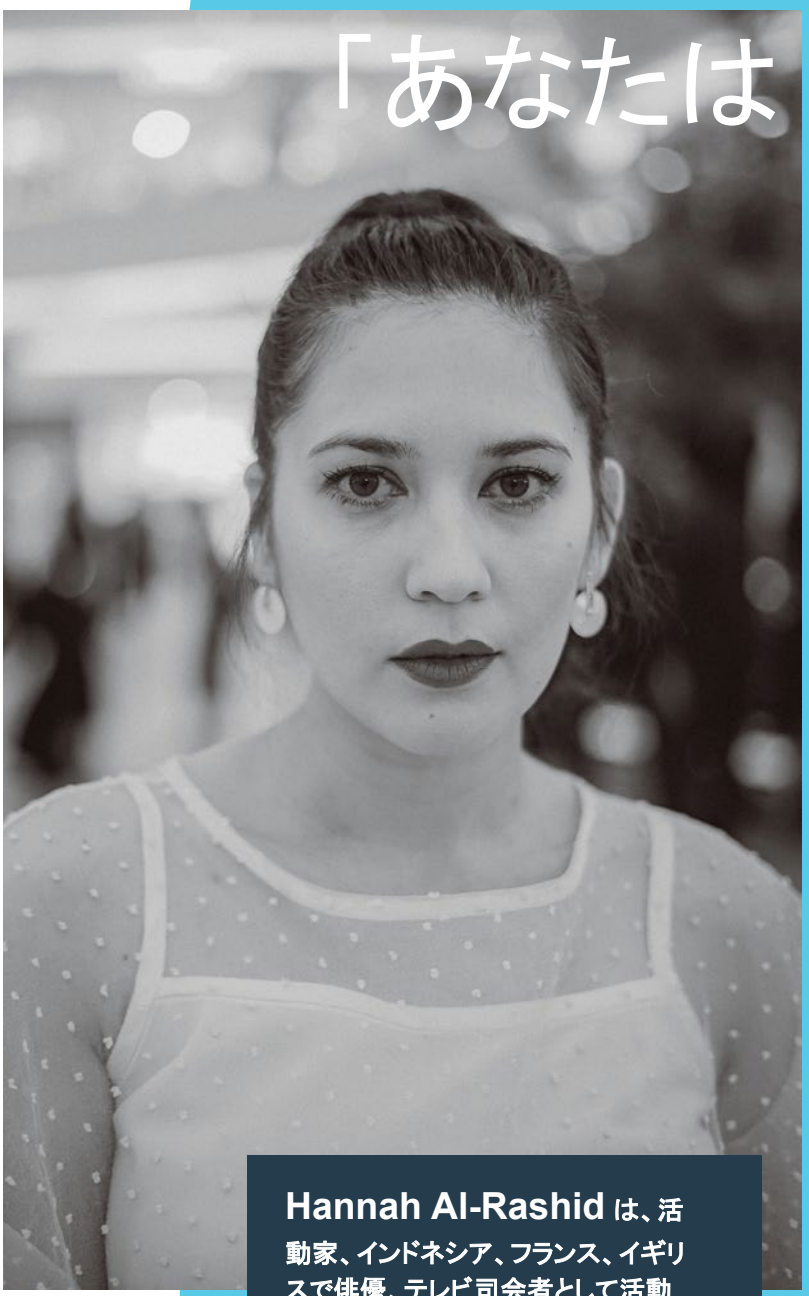
「ソーシャルメディアは、たとえば、発言し情報を共有できる素晴らしい場所になりうるものですが…頭のおかしい人々が匿名で誹謗中傷できる恐ろしい場所にもなりうるのです…だから、非常に難しい。恐ろしいことが匿名でできてしまう空間なのです。」

22歳、チリ



特集

「あなたは一人ではない」



Hannah Al-Rashid は、活動家、インドネシア、フランス、イギリスで俳優、テレビ司会者として活動し、ジェンダー平等を目指す国連インドネシアSDGsの推進者である。ここでは、自身が体験したオンライン・ハラスメントについて語っている。

instagram.com/hannahalrashid

私はオンライン・ハラスメントを経験したことがあります。

思い当たる経験を挙げるとすれば、2018年にジャカルタのウィメンズマーチに参加した際のオンライン上の反応でしょう。私が受け取ったヘイトコメントや脅迫の量には圧倒されました。私はフェミニストですが、その言葉が持つ否定的な意味合いから、ここインドネシアでその言葉を使うときには、とても気をつけなければなりませんでした。ヒジャブをあえて着用しないムスリム女性として、女性の問題について意見を述べることは、大半のインドネシア人が持つムスリムの女性像と衝突することになります。しかし、私たちはこうした現実の問題や社会にある誤解について話す必要があるのです。彼らは私たちを黙らせようとしますが、私は話し続けるつもりです。

人びとは、オンライン空間で起こることはデジタルだから危害はないと思っていますが、それは違う。実際はより悪質です。私は、オンライン・ハラスメントのために身体的危険を感じたことが何度かあります。過激なグループが以前、私の写真をソーシャルメディアのアカウントで公開し、『二度と声を上げさせないようにしよう』といったメッセージで、人びとを扇動して私を追いかけました。

こうした人々が匿名であることに力を感じ、私には彼らが誰であるかがわからないので、この時の経験に今でも恐怖を感じます。どうすれば、彼らを威嚇せず、自分の身を危険にさらさずに、オンライン上で意見を述べることができるのでしょうか。黙っているのは嫌です。

また、世代間ギャップもあります。年配の方は、オンライン・ハラスメントを深刻に捉えることもないし、フェイクニュースの存在も認めません。オンライン・ハラスメントを実際に体験したことがない人がほとんどで、被害の実態を理解していません。私たちが本当に必要としているのは、多くの女の子と女性が経験していることに人々が共感し、耳を傾けることです。

COVID-19で、これまで以上に多くの人がインターネットを利用するようになり、オンライン上に悪意が広がっているように感じます。悪意ある行動が増え、ツイートのやり合いや誤った情報も目につきます。誰もがイライラしているようで、誤解され、オンライン・ハラスメントにつながる恐れを感じて、言いたいことや共有したいことについて、自意識過剰になっているように感じます。

インドネシアでは、法律上、オンライン・ハラスメントにどう対処すればいいのか、よくわかりません。デジタルヘイトに関しては法制度が曖昧で、正式な制度として確立されていないため、警察に通報することに不安を感じるのも当然です。実際にできることは、ソーシャルメディアのプラットフォーム上での通報しかないのです。通報に関して…ソーシャルメディア企業は真剣に取り組む必要があると思います。

通報への対応ができていないと感じます。これまで通報したすべてのアカウントについて、何の対応もされていませんし、今現在何かが行われているかどうかも定かではありません。

実際、ここで投稿のフィルタリングなどの管理をしているのは、インドネシア人ですらないと聞いたことがあります。これでは、何も起こらないのも不思議ではありません。インドネシア語も話せず、文化的な背景も理解していない人がこうした通報のチェックをしているとしたら、安心してオンラインの世界にいることなどできるでしょうか。インドネシアは世界でも有数のソーシャルメディア利用国ですから、当然もっと配慮すべきだと思うのですが、ショックです。

オンライン・ハラスメントや暴力に苦しむ女の子たちにメッセージを贈るとしたら、私たちにはオンライン上にもっと健全な共存社会を作る力があると伝えたいです。アカウントをミュート、ブロック、アンフォローする、プライバシーを守るために個人情報を出すのは避ける。インドネシアでは、Jakarta Feminist Discussion Group、Hollaback Jakarta、SAFENET、Magdaleneなどの団体に、こうした問題についてアドバイスを求めることができます。何よりも、信頼できる人に悩みを打ち明け、共有することが大切です。

あなたは一人ではありません。

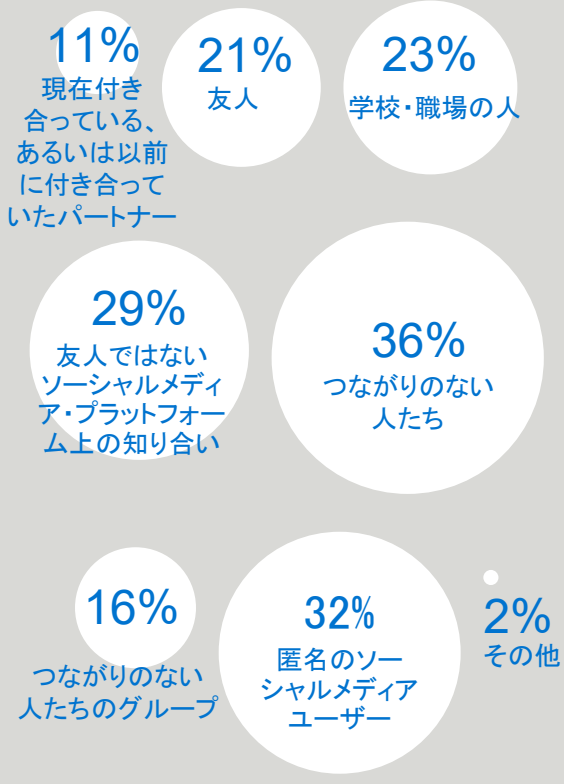
3. 加害者像

「つながりのない、しかも、ほとんどが男性です。」

18歳、エクアドル

ソーシャルメディアには匿名性があるにもかかわらず、女の子と若年女性たちにはハラスメントの行為者についてある程度のことがわかる。ハラスメントは知り合いによるものより、見知らぬ人によるものの方が頻繁で、恐怖も大きい。ハラスメントの行為者が知り合いである例には女性も含まれていたが、インタビューに回答した女の子たちの中には、知らないアカウントの背後に女性がいるのではないかと考えた者はおらず、背後にいるのは男性だと思うと率直に述べた。

調査対象の女の子、若年女性のうち、自身または知り合いの女の子、若い女性が、以下のグループに属する加害者からハラスメントを受けたことがあると回答した割合



学校の知人や近所の人の場合は、つながりのない人の場合ほどの恐怖はないかもしれないが、厄介で煩わしいことは確かである:

「そんな心境ではなかったので、もう押しつぶされそうでした。『一緒にいたくない』ってことははっきりしていました。でも、彼はそういう心境だったのです。同じ学校に通っていたし、ブロックすることができず、なかなか逃げることができなかった。そのうち話題になって、何があったのか知られてしまったのです。」

17歳、カナダ

「ソーシャルネットワークから目が離せなくなって、街中でも会うんじゃないかと怖くなりました。携帯電話に依存して、ふりまわされるようになりました。」

24歳、ペルー

加害者が知り合いではない場合、虐待はひどくなる場合が多い:

「ほとんどの場合が、たまたまなのです。はっきり言いますが、つながりのない人からのハラスメントばかりです。彼らは失うものがない。人間関係が壊れるわけではないですから。」

20歳、スーダン

ハラスメントの背後に誰がいるのかわからないだけでなく、それを見つけることが不可能であるため、止めるのは一層難しいことがわかると、女の子たちは特に無力感を覚える:

「彼らのほとんどが匿名アカウントを持っています。全員ではないけど…これらは本当のアカウントでも、本当の写真でもありません。だから、たとえ誰か1人を訴えようとしても、それは本当の人物ではないのです…それがとても不気味でした。私の友人が、彼女に自分のヌード写真を送ってきたグループの一人を捕らえようとしたことがありました。でも、その人は実在しないことがわかって、結局どうすることもできなかったのです。」

20歳、スーダン

KIIの参加者らが挙げることのできた加害者の特徴には、ジェンダー、年齢、政治的信条が含まれていた:

- **76%**が、自分にハラスメントをしたのはおそらく**男性**だと思うと回答
- **29%**がおそらく**女性**だと回答
- **47%がハラスメントの行為者の年齢を知っている**と回答
- **18%がハラスメントの行為者には宗教的なものを感じる**と回答
- **6%が(ハラスメント行為者の)政治的信条と人種の両方**に言及

多くの場合、女の子たちは、自分たちが受けたハラスメントの背後には男性や男の子がいる、それは例外的にというより、むしろ普通である、と強く主張した。

「私たちの暮らしている社会が家父長制であるため、フェミニストの友人たちは大抵、男性の標的にされます。こういう男性たちは、他のジェンダーの人に力を持たせたくないのです。」

17歳、フィリピン

「ほとんど男性なのですみません(笑)…ええ、ほとんどが若い男性です。年齢が上の場合もありますが、私が話したような、若い女性の存在を否定するような発言をする人たちです。」

22歳、チリ

女性たち、多くの場合は年配の女性たちが攻撃するのは、オンライン上で表明された意見や活動家が話す活動内容に同意できないからだ:

「私たちにハラスメントをしているのは、みんな男の子や男性だと感じています。女性たちからこのプロジェクトを認めないというコメントもありましたが、性的対象化に関しては確実に男性と男の子たちによるものだと感じています。」

23歳、アメリカ



ハラスメントの行為者として10代の少年たちを挙げる人が多かったが、中には年上の保守的な男性を挙げる人もいて、年齢的に明確なグループは存在しなかった。また、かなり頻繁に言及された特徴が、以下の引用に示されている:

「キリスト教の中でも人数の多い福音主義者たちが、私の死を願う…」

24歳、ペルー

「彼らには信心深いという特徴があって、そのほとんどが偽アカウントを使っています。」

19歳、インドネシア

また、17歳のあるカナダ人は、人種について言及した:**「ハラスメントをするのは白人が多い気がします。年配の白人男性であるかはわからないですが、白人の男性だと思います。」**彼女の発言は、政治的活動という文脈の中で出てきたもので、有色人種の女性活動家である友人たちが、人種差別を含むハラスメントを受けていると言う。

全体的に見て、どの年齢層でも、男性で保守的な人物がハラスメントの加害者像として浮かび上がる:特に、女の子と若年女性が発言し、自分の持つきわめて限定的な女性像に一致しないと特別な怒りを抱く人物である。

「フェミニストに関する話をしているので、まずハラスメントをするのは普通は男性です。私と同年代の若者の場合も、大人の場合もありますが…いずれにしろ若く、ソーシャルネットワークに強い関心があり、イライラを抱えています」

16歳、エルサルバドル

4. ハラスメントが女の子と若年女性に与える影響

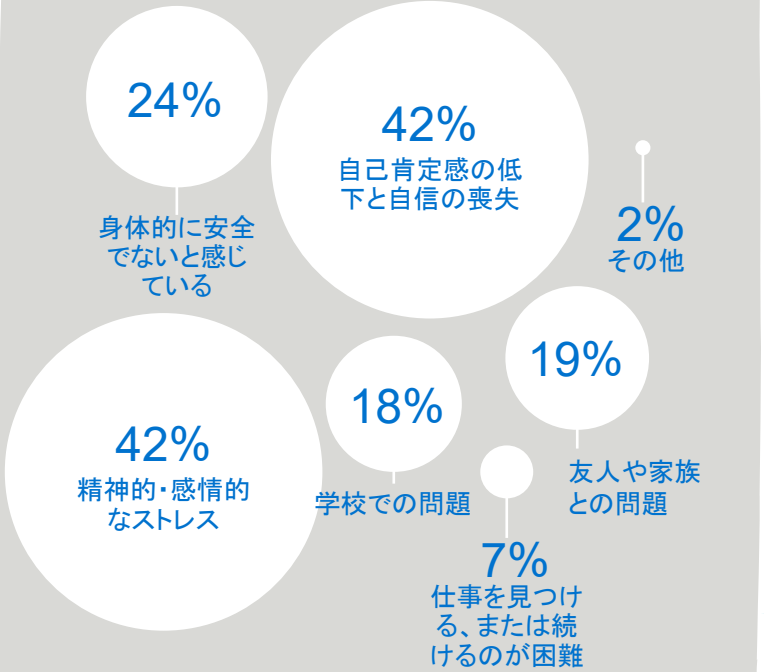
ハラスメントの影響は、女の子たちが受けるハラスメントの種類と同様に、多様で複雑である。怒りや決意とともに恐怖と不安、そして自分の意見の投稿を控える自己検閲という形での影響がインタビューから伝わってくる。

「とても不安です。それと激しい怒りも感じています。」

24歳、ペルー

この調査に参加した22カ国の女の子と若年女性たちは、オンライン・ハラスメントの経験によって、自己肯定感が低下したり、自信を失ったり、精神的・感情的ストレスを感じていると述べている。また、4分の1近くが身の安全が感じられないと回答し、その他にも学校での問題、友人や家族との問題、仕事を見つけることや続けることに問題が生じていると回答している。

オンライン・ハラスメントによる悪影響を感じている女の子と若年女性の割合



地域差もある。オンライン・ハラスメントを報告した女の子のうち、身の安全が感じられないと回答した割合がラテンアメリカでは33%、ヨーロッパでは27%であるのに対し、精神的または感情的ストレスに苦しんでいるという回答がアジア太平洋地域（49%）と北アメリカ（47%）ではもっとも高くなっている。オンライン・ハラスメントを経験したことのある調査回答者の42%が、ここに挙げられた影響を2つ以上感じていた。

64%の女の子が、オンライン上でハラスメントを受けたことで深刻な影響を受けている。

さらに詳細なインタビューで明らかになったのは、女の子たちは時間をかけてレジリエンス（回復力）を身に着け、年齢が上がるにつれて、対処できるようになるということだ：

「今は、ハラスメントの悪影響は感じていませんが…昔は、そのことでいつも頭がいっぱいでものすごく影響されていました。今はハラスメントをする側にうまく対処できるようになったので、大したことはないですね。」

18歳、ネパール

「そうですね、最初の頃は少し影響もあったかもしれませんが、今はもう慣れてしまって、笑うだけです..多分若い頃は、コメントを控えたりとかしていたと思います。でも今は、そうですね…」

22歳、チリ

若年女性にとって、オンライン上の虐待は生活の一部になっている。

「Instagramのアカウントを持っていれば、気分を害するようなコメントに出くわすのはある意味普通になってしまったので（笑）、あまり人に話すこともありません。普通にブロックして、続けます。なぜなら、そういうことが起きるたびに誰かにメッセージを送って話したら、かなり頻繁になるんじゃないでしょうか。」

23歳、アメリカ

このようにレジリエンスが高まってきたとはいえ、「大したことではない」という意見が多くの回答者の声で裏付けられているわけではない。調査結果からは、多くの厄介で受け入れがたい影響が判明した:

➜ 恐怖と不快を感じ、安全が感じられない

➜ 動揺、不安、憂鬱を感じる

➜ 罪の意識あるいはハラスメントをされるのは自分に何らかの責任があると思わされる

➜ 恥ずかしい気持ちになる

➜ オンライン上で活動を続ける気持ちがなえる

➜ 自信や自分を表現する力に影響が及んでいると感じる

恐怖を感じる、不安を感じる

➜ もっとも広く共通した影響は、**恐怖と不快を感じ、安全が感じられない**という反応であった:

「そして、すべての憎しみを目の当たりにして、実際に…少し怖くなりました…私はとても怖かった時のことを思い出します。」

22歳、チリ

「もちろん、(オンライン上でない)現実の生活の中の出来事と、不快さはまったく変わりません。突然、醜い写真が送られてきたり、やりたくないことをしろと命令されたりするなんて、誰も望んでいないですよね。ものすごく不快です。」

20歳、スーダン

「加害男性が私についての詳しい情報をどうやって見つけたのか分からず、私の住所を探し出して家に来るのではないかと心配になりました。本当にこわかったです。」

23歳、アメリカ

このアメリカの若い女性が訴えるリスクは、オンラインとオフラインの世界の境目がなくなる、きわめて現実的な可能性を示している。それ自体悪質なオンライン上の脅迫行為が、実際の対面へとエスカレートしていく。

➜ 次に多かったのは、**動揺、不安、憂鬱**に関するものであり、こうした感情は心身の健康に大きな影響を与えかねない。

「私はそのコメントを友人にメッセージで伝え、パニックに陥りました。私自身、こういうことが平気ではなかったので、友人が安心させようとしても無理でした。最初のうちは、友人に何を言われても、『まだパニックなの、まだ緊張しているの』って答えて…それでまた、すごく動揺してしまって。それにどう対処したらいいのかもわからず、結局堂々巡りになってしまうんです。」

17歳、カナダ

「とても気分が悪くて食欲もなくなり、何も食べられませんでした。…翌朝…医者に行くことになりました。医者に行くと、いくつかの検査をして、あなたは大丈夫ですが、あなたは…と言われました。今までかかったことのないような病気でした。そのせいで、病気になってしまったんです。ものすごい悪影響です。」

20歳、スーダン

南スーダンの別の若い女性は、ある若い女の子がとても動揺していた話をした:**「彼女は泣いていました。3日間、学校に行きませんでした」**。彼女はまた、他にも**「泣きを見ることになるから、もう二度とソーシャルメディアはしない。涙を流すことになるだけ。希望を失うことになるだけだから」**と言う人たちの話もした。

ソーシャルメディア上のハラスメントが生む心のストレスは動揺を与えるだけでなく、人生のさまざまな場面で、女の子たちの機会に紛れもなく大きな影響を与える。

すべて私の責任

➜ また、ハラスメントを受けたのは**ある意味自分のせい**だ、あるいは少なくとも家族からは責められている感覚があるという話も、女の子たちから上がった。

「実は、ストーカーからハラスメントを受けていたとき、その男に見られるから、自分の写真をあまり投稿しないほうがいい、と家族に言われたんです。あと、露出の多いような服は着ないほうがいい、と。それは、女の子が街でハラスメントを受けたときによく『体を覆い隠しなさい』、『外出を控えろ』と言われるのとほとんど同じだったんです。本当にイライラしました。」

23歳、アメリカ

恥ずかしさ、警戒心、無力感

➜ また、ハラスメントを受けたことを**恥ずかしい**と感じることも多く、女の子たちは気おくれし、さらし者になったような感覚になる。

「世の中すべてに疲れ切っていました。つまり、Facebookで私をフォローしてくれている友人たちにです。本当に嫌な気分でした。ソーシャルメディアをやめようかとさえ…そして、時には、やってもいないのに気まずい気持ちにさせられることもあります…スティグマ（恥辱）や差別をもたらすものなのです。」

23歳、南スーダン

➜ ソーシャルメディア・プラットフォームの利用をめぐるすべての経験が女の子たちに**警戒心を抱かせ、次に何が起こるのか**と神経をとがらせ、無防備だと感じさせる：

「完全に無防備でした。ネットワークにはプライバシーポリシーがあり、誰に見せるかを設定でき、私はそれを設定していたし、その人は私の友達リストにもなく、共通の友達もいませんでした…なのにネットワークを通して彼は私を見つけ、私が何をしているかを知ることができました。その人がどこにいて、私のどんな写真を持っているのか、誰が私を助けてくれるのか、考えなければなりませんでした。」

17歳、エクアドル

「時々、スパイされているんじゃないかとか、誰かが私のアカウントをハッキングしているんじゃないか、あるいは何か起こりそうな気がしているんだろうけど…頭が混乱して、次に何が起こるかなんてわからないし…だから、その人をブロックして、そして、何かが変わるのを待つしかないのです。」

23歳、マラウイ

➜ また調査結果から、オンライン・ハラスメントには抑圧的で無力感に陥らせる力があり、女の子たちは徐々に自信を失い、自己肯定感そして自分の能力と判断力への**自信が少しずつ崩れていく**ことが明らかになった。

「一番大変なのは、写真をアップロードするときに、世界の半分にそうすべきか聞かなければならないことです。普段と違う写真をアップロードするときはいつも心配になりますよね…恐怖の中で生き続けるには、投稿したり書いたりする前に少なくとも10回は考えなければならないのです。」

17歳、エクアドル

「私の友人にもそういう経験をした人がいます。女の子であるがために、自身の意見を表現する自由がなく、思い通りに発言する機会がなく、本当に悲しい思いをしています。」

23歳、ミャンマー

検閲と沈黙を強いられる

オンライン・ハラスメントが生む懸念は数多くあるが、その一つが、女の子と若年女性のオンライン上の自由に及ぶ影響である。多くの人が、投稿を減らし、発言や写真の使い方にもっと気をつけなければ、と感じている。これは意識的に仕向けられている場合もあれば、そうでない場合もある。

「正直なところ…私の友達のプロフィールを彼が見つけられるのがわかっていたから、もしかしたら無意識のうちに、友達や親しい人たちと出かけた時の写真をあまり掲載しないようにしたのかもしれません…正直なところよくわからないのですが、投稿したいことを投稿したり、言いたいことを言ったりするのを邪魔されないように自分からそうしているのかもしれません…」

23歳、アメリカ

調査結果から、オンライン・ハラスメントを頻繁に経験する女の子ほど、そのソーシャルメディアの利用を減らしたり、完全に利用をやめたりする可能性が高いことが明らかである。

非常に頻繁にハラスメントを受けたことがある女の子のうち、19%がソーシャルメディア・プラットフォームの使用を減らし、12%は使用をやめたと回答した。

このことは詳細なインタビューから裏付けられた。

「私の国でも起きていることで、多くの女の子が苦しんでいて、多くの女の子がFacebook…つまり、ソーシャルメディア全般をやめてしまいました。そして、若い女の子たちは誰ともつながらず、一人でいるようになりました。」

23歳、南スーダン

「オンライン・ハラスメントを経験した友だちは、ソーシャルメディアに活発に投稿しなくなりました。」

17歳、フィリピン

女の子たちがオンライン上で自由に発言できなくなっているのは明らかだ:

- **非常に頻繁にハラスメントを受けている女の子の18%が、自分の意見に関する投稿をやめている**
- **非常に頻繁にハラスメントを受けている女の子の16%が、ハラスメントを避けるために自分の表現方法を変えている。**

「中絶について話すのをやめました。LGBTIQ+についてもあまり話さなくなりました…」

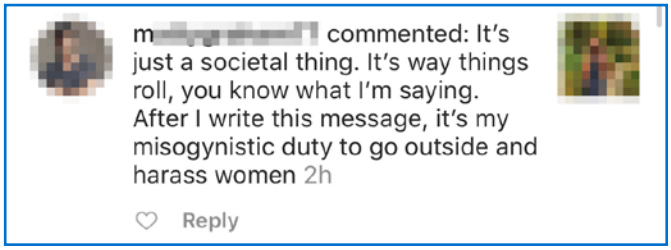
24歳、ペルー

若い女の子たちの方が、投稿内容について自信がない傾向があるが、年齢を問わず、多くの人が意見の分かれるテーマを避けるようになる。

「性暴力やフェミニズムをテーマにすることに不安や無防備さを感じるようになり、公開するテーマや内容に注意するようになりました…まず、人々がどう反応するかを考えます。」

18歳、エクアドル

女の子たちが身の安全を脅かされ、感情的ストレス、不安を与えられ、自信が低下し、自分の考えや気持ちを率直に表現することを恐れているという状態は、他人（主に男性）の言論の自由という「権利」のために女の子たちが大きな犠牲を強いられているということだ。彼女たちは、多くの者にとって勝ち目のない絶え間ないハラスメントに、ほぼ自分だけで対処しなければならない状況に置かれている。



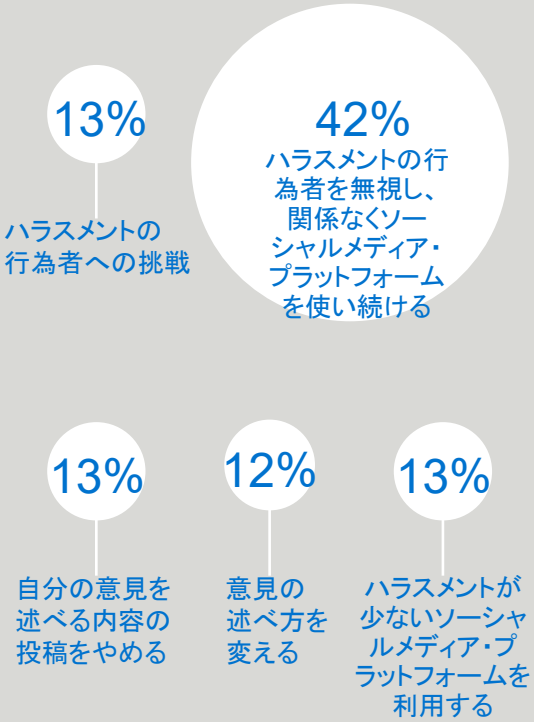
対処法

「以前はスクリーンショットを撮って、受けたヘイトをアーカイブにしていました。でも削除しました、正直なところ、そのほとんどが意味などなくて、ただの罵詈雑言だからです。」

22歳、チリ

これまで見てきたように、最初、女の子たちはまさに苦闘しながらだが、そのうち決意を固め、予想されるハラスメントに対処するために、次第に自分の行動やテクノロジーの面で戦略を練るようになる。そして大半が、ハラスメントの行為者を無視して続けることを選択する。

自分の行動を通した解決策を選ぶ女の子と若年女性の割合



回答者の中には、真っ正面からハラスメントに取り組み、成功した者もいる:

「私はとにかく一歩踏み出して、この男性を探そうと思い、この女性と一緒に行って、『あなたは何をしたのですか?ソーシャルメディアでこの女性に何をしたのですか』と尋ねました...この女性に謝罪し、Facebookでも謝罪するよう彼に要求しました…私は彼に『もしそうしないなら、これは犯罪だから、警察に突き出す』と言いました。私の国では犯罪とはまったくみなされませんが...その男性は私に同意して、『わかった、わかった。申し訳なかった。この女の子に先に謝罪する』と。...彼は私の前で謝り、その後ソーシャルメディア上で謝りました...私は彼に、『もしあなたの姉妹や母親がこういう目にあったら、どう思うのですか』と尋ねました。」

23歳、南スーダン

しかし、全体として、ハラスメントの行為者と直接関わるのは、あまり効果的でなく、いつでも行えるものでもないということが、調査結果から感じられた。

「ハラスメントが始まった当初はもちろん、本当に腹が立って、何から何まで返信していたんです。そして、友達には一緒に頑張ろう、と言ったものです。でも結局、無視するようになるのです。なぜなら、彼らは決して止めないし、状況が悪化するだけだから。」

20歳、スーダン

ソーシャルメディアを使い始めた当初なら、女の子たちはハラスメント行為者に立ち向かうかもしれないが、その後効果がないことに気づいてやめてしまうという結果は、量的分析でも裏付けられている:15歳では20%が「ハラスメント行為者に挑む」と回答し、23歳では12%に減少している。また、最初は恥ずかしさや羞恥心から、家族や友人にハラスメントを打ち明けられなかった女の子たちも、次第に声をあげ、支持を求めることが重要なことに気づくようになることも明らかになっている。

「あの時は、本当に怖かったし、なんだか恥ずかしかった。そんな思いがあったから、誰にも言わずに秘密にしていたんです。でも、本当は共有する必要があるし、親しい友人、少なくとも家族には知らせておく必要があると今は思います。なぜなら、何か深刻な事態が起きたとき、助けてくれるのは彼らだけだからです。でも、もし誰もこのことを知らなかったら、誰もあなたを助けることはできません。」

21歳、ミャンマー

女の子と若年女性の42%は、ハラスメントを無視して(オンライン上の活動を)続けていると答えているが、こうした姿勢を貫くのは難しい。多くの場合、ハラスメントの経験から女の子たちは自分の意見と個人情報の両方に注意せざるを得なくなる。そしてある思春期の女の子は、目立つと標的にされやすくなるため、目立たないよう同調すべきだというプレッシャーもあると語った。

「体形を侮辱された友人は、他人を喜ばせるため、社会的な基準に合わせるためだけに、自分を変えようと決意するようになりました。」

17歳、フィリピン

「私はソーシャルメディアについて慎重派で、投稿や共有する内容に非常に注意しています…時には自分の見解についてバランスを取る必要があります…私の発言はあまり過激ではありません。私の投稿で誰かを傷つけたくはないです…また、自分の意見を述べるさいには、マナーを守りながら相手に知ってもらいたいメッセージを伝えることが必要です。」

21歳、ミャンマー

誰もがこの戦略をとるわけではなく、上記の若い女性も、別の行動をとった友人を賞賛していた。

「彼女は『本当に憂鬱…もううんざり、こんなことはもうしたくない、自分のアカウントを使って自分の意見を伝える自由すら私にはない』と言います…それでも、彼女はやり続けます…自分が正しいと思うことをやるのみなのです。そして今はもう、彼女は気にしてないんだと思います…プライバシー設定とか全部変えずに、何でも投稿しているのです。」

21歳、ミャンマー

変わる必要があるのは彼女の友人ではない、と彼女は付け加えた。彼女は自身のアイデンティティを保つことを許されるべきなのだ:**「私はただ、コミュニティや人びとに、私たちの状況をもっと理解してほしいだけなのです」**。変わるべきは女の子ではなく、彼女たちを取り巻く世界であるというこの考え方は、別の回答者も言及している。

「ソーシャルメディアで…女の子の権利、女性の権利について写真をたくさん投稿し続けました。否が応でも、これが私のやること…今までずっとやってきたことであり、私は何も変えないし、今では周囲が慣れてきています。」

23歳、南スーダン

インタビューした若い女性活動家の多くは、目的のために戦っており、それが彼女たちを動かし、彼女たちの行動を決定づけている。

「こういうことになったからと言って、関心のあることを共有することをやめるつもりもないし…自分の行動を変えるつもりもありません…私の信念です。自分の情熱を注いでいることなのです。権利や人権全般のように。そして私が言うように、ヘイトのせいで自分の行動や考え、信念を変える必要はないのです…私はこうした(ハラスメントをする)人々のために自分の行動を変えるつもりは毛頭ありません」

22歳、チリ

特集



Clauvid Daly は2019年のミス・ドミニカ共和国で、同年のミス・ユニバースのファイナリストになった。ソーシャルメディアに多くのフォロワーを持つ彼女は、ジェンダーと人種の両方をめぐる差別と虐待と闘う、ユース活動家だ。彼女がオンライン・ハラスメントの経験について語る。

「信頼できる人に相談する...」

公人である以上、当然あらゆるハラスメントにさらされているし、一線を越えて殺害脅迫やわいせつな提案を受けると問題になります。

でも、公人でなくてもハラスメントの対象にはなります。ネットワーク上では誰にでも起こることなのです。私の場合、国を代表して国際大会に出場するにつれ、ハラスメントと暴力は激しさを増していきました。否定的で人種差別的なコメントや殺害の脅迫で、私は心を病み、あまりにもひどい状態になったとき、私は両親のサポートを求め、セラピーを受け始めました。

人びとは、自分たちがもたらす影響と痛みを理解する必要があります：ネットワークは武器であり、創出するため、あるいは破壊するために一どう使うかは、私たち次第です。自身の体や世界、その目的について学び始めたばかりの若い女性の人生を一つのコメントが変えてしまうかもしれないのです。

すべてのソーシャル・ネットワーキング・サイトには、もっとできることがあります：ユーザーが不適切な行為に及んだ場合、アカウントに制裁を加える必要があります。制裁には、一定期間アカウントをブロックすることや、ログインの永久削除も含まれます。ハラスメント（攻撃）の深刻さにもよりますが、深刻な場合には、法律による処罰が必要です。ソーシャルメディア企業も、ネットワーク上で注意すべきことに関する情報提供と、若い女性の意識喚起を行う必要があり、電話の背後には生身の人間がいて影響を受けるかもしれないことを、自分の発言がどれほど害を与える可能性があるかを理解させる必要があります。

また、自身のアカウントが非公開であっても、公開されたものはすべてインターネット上に永遠に残るということも認識させる必要があります。

被害者が自殺に追い込まれる場合もあると聞いています。オンライン上の人びとに責任があるにもかかわらず、起訴されなかったり、責任を問われなかったりするのです。最近では、オンライン上で未成年にハラスメントをしていた男が、被害者の親と女の子が声を上げたことで逮捕されたように、責任を問われることもあります。でも残念ながら、こうした配慮に至るまでには、多くの事件が起き、多くの証拠が集められなければなりませんでした。とにかく、まだまだなのです。

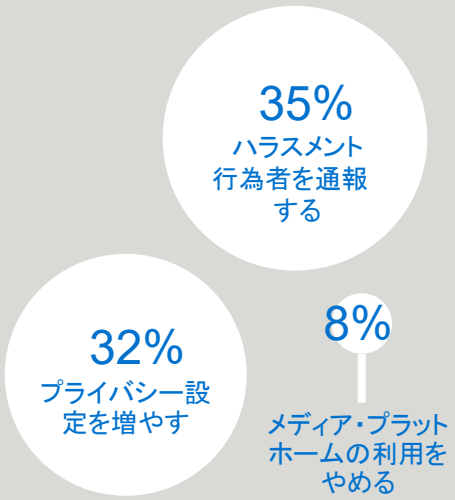
重要なのはコミュニケーションと支え合いです。不適切な行動をする人を見かけたら、通報しましょう。

最後に、そしてもっとも重要なことは、ユーザー、この場合は女の子と若年女性、に、物事を個人的に捉えないように教えることです。ネットワーク上で人びとは常にさまざまな事について話していることを知り、どのサイトに留まるべきかを知ることです。自身の成長にプラスになる人、学びを得られる人をフォローし、害になる恐れのある人は避けましょう。自分の心と精神の健康は、他人が自分について何を言っているか気にするよりもずっと重要です。知らないユーザーと話すのは、彼らの意図が分からないので避けましょう。バーチャルであることが有利に働きます：もしハラスメントを受けたら、アプリケーションを削除し、信頼できる人に相談する時間を設けましょう。

ブロック、通報、プライバシー設定を増やす

多くの女の子と若年女性は、自身の行動を変えるのではなく、成功の程度の差こそあれ、ハラスメントにテクノロジーで対処しようとする。

テクノロジーを活用した解決策を選ぶ女の子と若年女性の割合



残念ながら、ハラスメント対策として通報とブロックがもっとも多く使われていたが、どちらも効果的ではないことが判明した。アカウントをブロックすることはできるが、ハラスメント行為者は、さまざまなソーシャルメディア・プラットフォームで新しいアカウントを作り続ける:

「ブロックしても、彼はさらにプロフィールを作り、私の写真を送り続けていました。」

17歳、エクアドル

「アカウントを通報しても数日でまた戻ってきているので、通報制度は効果的とは言えません。」

20歳、スーダン

行動を起こすには、相当数の人がアカウントを通報する必要があり、支持者がそれほど多くなかったり、1対1のハラスメントを受けたりする思春期の女の子を保護するためには、この方法はほとんど役に立たない。チリのある若い女性が気づいたように、二重規範が適用されている:例えばセクシャルハラスメントを通報しても何も起きないのに、女の子が乳首をモチーフにしたコンテンツを投稿すると、**「一生禁止される」**という。

多くの女の子と若年女性が、オンライン上で自分の安全を守るには、大変な努力が必要だと回答している。

「不要な人を一掃すること。人を排除する方法を学ぶこと。でも、身近な人脈とのつながりもあるから、心情的にいろいろ大変です。関係を断ち切るのは難しいです」

24歳、ペルー

「...私は時々安全でないと感じることがあります、だから自分のInstagramアカウントを制御しています。四半期毎に自分のInstagramをチェックすると、私をフォローしている人には実に数多くのタイプがあるのがわかるので、そういう人たちはいつもブロックします。また、自分のアカウントで、どれくらいの人が私の写真を共有しているかもチェックしています。」

19歳、インドネシア

「まあ、プライバシーには気をつけましょう。自身のフルネーム、住所、勉強している場所、職場は公表しないこと。また、友人である人びとにも気を配ること。自分の個人的な写真は公開しないこと。誰も受け入れないこと。自分に来る依頼のプロフィールを見極めること、それがセキュリティの手順です。」

16歳、エルサルバドル



女の子たちは（オンライン上で）安全に活動する方法を自分の力で学ばなくてはならないが、ハラスメントがオンライン上のセキュリティについて考えるきっかけになることも少なくない。

「その年から、将来その種のことが起こらないよう、セキュリティ設定を上げる方法を調べ始めました。最初からではなく、Facebookを使って1年経った頃から、そういうことをするようになりました。」

21歳、ミャンマー

「ソーシャルメディアに投稿する内容や発言について、本当に意識するようになりました…自分のアカウントがすべて非公開になっているのを確認したことを覚えています」

20歳、スーダン

女の子と若年女性たちのハラスメント対処法について一つだけはっきりしていることは、ふるまい方であれ、テクノロジーの活用であれ、彼女たちがほとんど自分自身で何とかしようとしているということだ。

「私を守ってくれる人はいない…孤独なゲーム、そう、独りだけのゲームです。」

23歳、マラウイ

強さの源

「私が持っているような力強い支えがない女の子たちに、もしそんなことが起きたらなんて、とても想像できません。なぜなら、母や友人、友人たちと私のいるグループは、ただ話しかけてくれるだけですが、私はもっと大きな存在だ、私には力がある、と言い続けてくれる。彼らがいるから、私は立ち向かうことができるのです…特に母の支えはものすごく大きいです」

21歳、ミャンマー

調査参加者の女の子と若年女性たちは攻撃を受けても驚くべきレジリエンスを発揮して立ち直る。彼女たちは、多くは目的に対する情熱に突き動かされ、でも、それだけでなく（オンラインの世界から）追い出されまいという強い決意に支えられて進み続けている。ソーシャルメディア・プラットフォームは日常生活に必須であり、彼女たちには、その世界にいる権利、そして自分らしくある権利がある。

「今の自分を変えたくない。これが私なのです。もし自分を変えたくないなら…すべての人にとってもっとも重要なことは、ジェンダー平等について知識を得ることだと思います。だから私は、オンライン上や公共の場での活動を絶対にやめません。」

19歳、インドネシア

ソーシャルメディアと距離を置くことで、飲み込まれずに済むとある程度気づいてはいるが、それ以外に多くの女の子と若年女性たちが経験している絶え間ないハラスメントに対処するために、自分だけでできるセルフケア対策を意識的に取り入れている者はほぼいないことが議論からわかった。多くは、家族や友人、他のソーシャルメディアユーザーのサポートに頼っていた。

「私がやっていることを正確には理解していなくても、私がしていることを気にしてくれるような、本当に私を支えてくれる友人たち。そういう存在があるから私は進み続けられるのです」

17歳、カナダ

「フェミニズム運動をしている人の中に、2、3人私がいつも頼りにしている人たちがいます。メッセージを書いて話を聞いてもらいます。」

24歳、ペルー

多くの人は、オンラインでしている仕事やフォロワーからの応援が、続けるエネルギーになっている。

「疲れるし、確認したくない、なぜ憎むのか、なんて。そう思って当然です。でも、同時に…これが役に立っているという人たちからは、たくさんの愛が届きます。だから、そういうメッセージを受け取ったとき、やっていて良かったと思います」

22歳、チリ

「前向きな気持ちは、後ろ向きな気持ちに勝るのだと思います。…そして、自分に起こったことについてメッセージを送ってくれた人は皆、話す場があることにとても感謝しています…メッセージをくれた人は皆、これで自分の人生が変わった、率直に話せるようになったと感じています。だから、続けるエネルギーが湧いてくるんです…いつも、力を取り戻しているような気がして、とても気分がいいです。」

23歳、アメリカ

形はさまざまだが、彼女たちを支えているのは、コミュニティの感覚である。特定の組織から支援を受けられると言う者もいたが、実際には、投稿を続けると決心しているだけで、自分自身の感情や精神的なウェルビーイング（幸せ）をかなり犠牲にすることもある。

オンライン・ハラスメントは、女の子と若年女性に深刻な影響を及ぼしている。大多数が自己肯定感の喪失から精神的・感情的ストレス、家族や友人との問題に至るまで生活面で多くの悪影響を受けている。また、オンライン・ハラスメントのせいで、女の子たちは好きなようにソーシャルメディアを使うことができないうえ、常に警戒することで疲れ切っている。

目的の実現に直接つながる多くの道と空間の広がるオンラインの世界であれ、私たちが暮らす街の通りやバス、公園であれ、しっかりと舵を取って進む彼女たちの能力が足りないのは同じだ。そのどちらにも、性差別、そして彼女たちに絶え間なく向けられる否定的な眼差しがある：女の子と若年女性たちがただ思いのままにいられることなど、まずないのだ。



5. 女の子だから: ストリートからソーシャルメディア上まで広がるハラスメント

「ストリートハラスメントもオンライン・ハラスメントも、不適切な発言をすることで誰かを力で押さえつけようとするものだと思うので、その行為も動機も似ていると思います…どちらも若い女性であることで被るものだと思います。」

23歳、アメリカ

調査の中で、女の子と若年女性にオンライン・ハラスメントとストリートハラスメントを比較するよう求めた。調査回答者の50%が、ストリートハラスメントよりもオンライン・ハラスメントの方が頻繁であると回答したのに対し、その逆は19%であった。インタビュー回答者は、この二つには共通する点があり、境界線がなくなってきていると感じていた。

「私は、同じだと思います。オンラインだろうが公の場だろうが、セクシャルハラスメントであることに変わりはないので同じです。」

19歳、インドネシア

「どちらの状況でも、女の子と若年女性は自分の人生を生きようとしているだけで、スーパーに行ったり、学校に行ったり、Instagramに何かを投稿したりしていると思います…それがいきなりこういうことが起きて私たちを支配し始めるので腹が立つのです。ソーシャルメディア上でも街中にいても、いつでも起こりうることを思い出させるのですから。」

23歳、アメリカ

また、チリのある若い女性が述べたように、ストリートハラスメントもオンライン・ハラスメントも**「とても不快でものすごく恐怖を感じさせる」**のだ。

ソーシャルメディア上の出来事は永遠に存在するという点が、オンライン・ハラスメントを一層悪質なものにしていると感じる若年女性もいた。

「ソーシャルメディア上のことは(ストリートハラスメントよりも)長く続くので、ほとんど一生、あなたを悩ますことになるのです。たとえあなたが変えようとしても、保存しておいて…後日、誰かがそのことを投稿したいと思えば、そうするのです。」

24歳、タンザニア

「オンライン・ハラスメントはエスカレートしており、やめさせることも、対処も難しい状況です。一度オンライン・ハラスメントが広まれば、どこでも、誰でも見ることができて、面白がって挑発する人も出てくるでしょう。実際の生活よりオンラインの世界の影響は大きく、精神的にも感情的にも追いつめられるので、本当に憂鬱です。」

21歳、ミャンマー

全員が賛成したわけではない。

「でも、誰かが私に触れようとすると、さらに気分が悪くなります。それは身体的なことだから。」

23歳、マラウイ



どこが安全だと感じるかという問いには、一言で「どこにもない」と答えることができるだろう。

「どちらの空間でも安全は感じませんが、オンライン上のいじめの方が、情報量はずっと多い。街では、通りを歩いていれば、建設業者は笛を吹き、大声で叫びますが、あなたは通り過ぎます。でも、オンライン上では、ストーカーはずっとあなたを見ていて、あなたやあなたの家族、あなたの好きなものについての情報を持っています。オンライン上のストーカーが持つ情報量はずっと多いのです」

17歳、エクアドル

「私の場合、オンライン上では、コメントを見たくなければ、あるいは彼らのメッセージを見たくなければ、少なくともある程度、少しの間はミュートすることができます。もちろん、一日の終わりにその深刻さに応じて感じる精神的負担はあります。でも、私にとっては、自分の経験から言って、身体的なハラスメントからは逃れられないけれど、オンライン上では逃れることができるので、違いはあると思います。」

17歳、カナダ

オンライン・ハラスメントの特徴のひとつは、加害者が「何をしても罰せられない」と思っている点である。ハラスメントは目に見えるものであっても、加害者は匿名のままでいられるため、あるはずの自制心がなくなってしまう。被害者の救済策はほとんどなく、罰せられることはおろか、捕まる可能性も低い。

「ネットワークでは匿名性がすすみます。ネットワークを通じて誰かにハラスメントや暴行をされても、多くの場合、誰に通報すればいいのかすらわからないのです。」

23歳、スペイン

警察や法制度からの支援は限られており、ソーシャルメディア企業や、当局がもっと全般的に効果的に動くわけでもない。街頭でのセクシャルハラスメントは目に見える犯罪行為であり、訴追される可能性が高いのに対し、これまで見てきたように、オンライン上では女の子と若年女性たちは自身で解決するしかないのが実態だ。

「リアルな生活の中のハラスメント行為者の方が、自分の行動について、少なくとも少しは心配したり、慎重になったりすると思います。しかし、彼らはソーシャルメディアでは何を言っても、何をやってもよいと感じています。彼らは画面の向こう側にいて、あなたが彼らにできることは何もないと知っているからです。」

20歳、スーダン

「路上では、誰かを探す、走る、叫ぶといった対策がとれます。ハラスメントは暴力だというポスターもあります。人びとはそれが犯罪だと理解しています。ソーシャルネットワークではそうではなく、見えないものです。彼らにとってそれは暴力ではなくコメントなのです。」

24歳、ペルー

6. 変化をもたらす

現在、オンライン上の女の子と若年女性を守る対策がほとんどとられていないのは明らかだ。彼女たちが受けている仕打ちは受け入れがたく、恐ろしいものであり、止めなければならない。責任の所在を明らかにする必要があり、女の子たちからは、ソーシャルメディア企業と政府の責任を問う声が圧倒的に大きい。

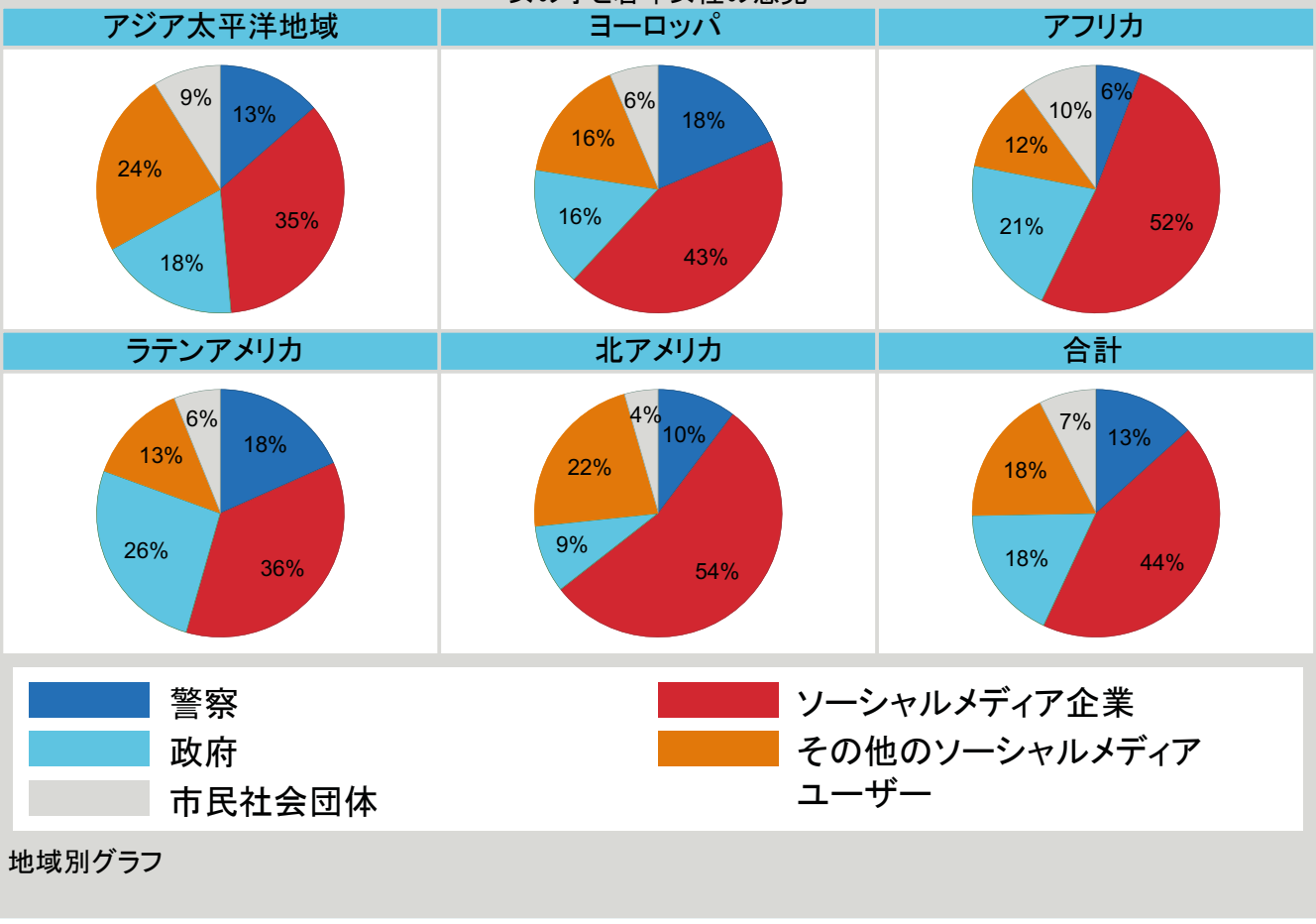
22カ国で実施されたこの調査では、オンライン・ハラスメントと闘うために、誰がもっと行動するべきかを女の子たちに尋ねた。警察、ソーシャルメディア企業、政府、ソーシャルメディアユーザー、市民社会組織の中で、ソーシャルメディア企業がトップに、次いで政府が続いた。

何ができるのか、何をすべきかという議論は、大きく次のように分類された。

- ➜ **教育・啓発**
- ➜ **女の子と若年女性のエンパワーメント**
- ➜ **女の子と女性の描かれ方への取り組み**
- ➜ **社会に根づくジェンダー規範への取り組み**
- ➜ **法の制定・施行**
- ➜ **技術活用**

女の子と若年女性に対するオンライン・ハラスメントの撲滅に向けて行動すべき主体

女の子と若年女性の意見



地域別グラフ

問題への意識喚起

➜ ハラスメント行為者を教育し、より安全で自由なオンライン環境を目指すことが最優先事項である。

「女の子自身も、普段女の子にハラスメントしている人たちも、皆、もっと意識を向けてほしい。男の子はオンライン上でとるべき行動について学ぶべきだし、女の子にはどう対応すべきか、何をすべきかをもっと意識させるべきです。」

20歳、スーダン

「セクシャルハラスメントとは何か、オンライン・ハラスメントとは何か、その影響とは何か、知識の共有をもっとすすめなければならないと思います。」

17歳、インドネシア

「インターネットに存在するリスクについて教育し、ハラスメントを訴えるための仕組みについて教えるべき。」

18歳、エクアドル

ある16歳は、親やメディア、教師も学ぶ必要があるとコメントしている。「彼らには知識が不足している」。一方で若者は彼らの助けを必要としている。別の若い女性からも同じ声が上げられ、彼女は、オンライン上の性的虐待から若者を守るため、また自分を守る方法を子どもに教えるために、親はもっと責任を持つ必要があると感じていた:

「私がFacebookを始めた当時、家族も両親もFacebookを知らなかったし、プライバシー設定についても知らないのは私と同じで、両親の友人にも知識がありません。だから、ソーシャルメディアから私たちを救う上で、親の果たすべき役割は大きいと思います。」

18歳、ネパール

また、公共のキャンペーン、学校教育、メディアやNGOによる教育も、今後とるべき方策として挙げられた:

「キャンペーンを行ったり、一般の人を教育したり、ソーシャルメディアを安全に利用するうえで権利と責任について啓発したり…特に若い人たちはピア・エデュケーション（同世代の学び合い）、あるいは有力な組織や大きな組織からこうしたキャンペーンや教育コンテンツをソーシャルメディアやニュースなどのプラットフォームで広めることができると思います…女の子たちは十分な知識がないままソーシャルメディアを使い始めるため、まず彼女たちを教育する必要があります。」

21歳、ミャンマー

➜ **エンパワーメント**: ハラスメントの影響を減らす方法を学ぶために、女の子たちは自身にも目を向けていた。加害者を攻撃するのではなく、自分の行動と態度を変えようとする姿勢が多く見受けられる。

「女の子たちが強くなることが大切だと思います。どんなコメントやメッセージにも傷つかず、左右されないよう、自己肯定感を高め、いちいち反応しないようにするのです。」

16歳、エルサルバドル

➜ **彼女たちを取り巻く世界**: インタビューでは、有害なステレオタイプがなくならない責任はメディアにあると、メディアを非難する声も上がった。

「最悪なのは、多くのメディアが、私たちはモノであり、リーダーになる能力がない、あるいは弱い存在であると見せ続けていることです。だから、多くの人が、私たちをモノとしてしか見ていないのです。メディアの責任は本当に大きいと思います…メディアは女の子に対する見方を、女性に対する見方を、変えるべきです。」

19歳、インドネシア

私たちが暮らす社会

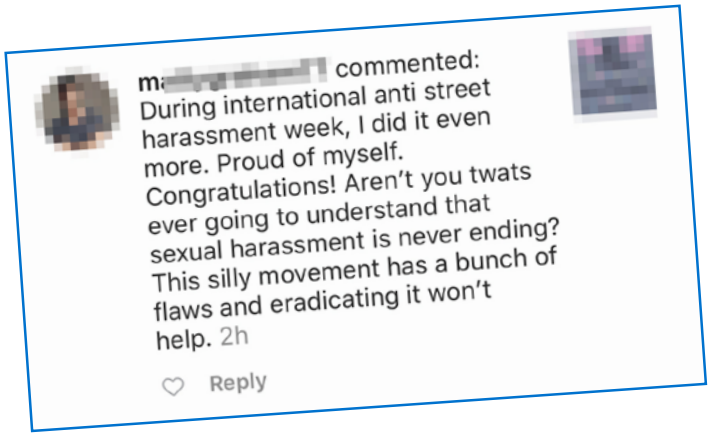
➜ オンライン・ハラスメントを助長する問題として、**女の子と女性に対する社会の性差別的な考え方**が挙げられた。

「何かを投稿するのはとても勇気がいることです。特にアフリカの人は…アフリカの国では、女性は常に後ろに控えているべき存在として見られていると感じます…そのため、社会で男性よりも優れたことをするたびに、彼らはあなたを侮辱できると感じるのです。だって彼らはあなたが自身よりも優れた位置にいることを望んでいないのですから。」

23歳、マラウイ

「私一人ではないので、社会として共通の利益を生み出し、ソーシャルネットワーク上の女の子を保護することができるでしょう。女の子の写真を共有するような、もっと悪いこともあり、写真の共有を阻止するキャンペーンをしなければなりません…私の学校のコンピューターにある女の子の写真が貼られていました…彼女は休み時間に外に出ず、トイレにこもっていて、その後、音信不通になりました。こんなことは、男には起こりえません。」

17歳、エクアドル



法律と政府

➜ **政府**：回答者の中には、法律と国家が女の子たちの経験しているハラスメントの深刻さを認め、何らかの保護策を講じることを期待する者もいた。

「私の国には、彼らを罰し、規制する法律が必要だと思います…多くの女の子や女性が苦しんでいるのですから。」

23歳、南スーダン

「たとえあったとしても実際に実行されていないのだから、オンライン上の人々の保護を強化する政策を作るよう政府に働きかけること。国と協力すれば女の子の安全を強化することができるのかはわからないけど。率直に言えば、女の子だけではなく、すべての人の安全ですが。」

20歳、スーダン

技術活用

➜ 最後に、半数近くの回答で、**技術的な解決策**が議論されている。次の行動を起こすべきは、まさにソーシャルメディア企業なのである。インタビューでは、効果的な通報メカニズムとその利用方法に関する情報の重要性がたびたび強調され、外部の組織やプラットフォーム自体に正義を求める声が上がった。

「通報や助けを求める方法を教え、助けてくれる人や機関を紹介するのです。」

17歳、フィリピン

「…女の子たちに、何を、どう対応すべきか、何をすべきか、すべてをもっと意識させるのです。」

20歳、スーダン

ある若い女性は、Facebookに通報機能があると思うが、その仕組みを知っている人はあまりいなかったと述べた。

女の子と若年女性たちが何とかやっていくのに頼るだけではダメだ。ソーシャルメディア・プラットフォームは、そのスキルを活かしてコンテンツをより厳しく監視し、ジェンダーに基づくオンライン・ハラスメントの加害者に責任を負わせ、交差性のあるアイデンティティを持つ女の子たちに対するハラスメントの影響に関する情報の収集など、ジェンダー別・年齢別データの収集・公開を通して、オンライン・ハラスメントを阻止するためのアプローチをより積極的に行うことができるはずである。また、デジタル・シティズンシップ教育や安全で目に見える通報メカニズムを提供することも重要だ。

「非公開のFacebookグループやウェブサイト、WhatsAppグループなどは活動家がハラスメントを通報し、サポートを受けられるプラットフォームです…こうした問題に関するトレーニング、管理マニュアル、通報方法など。オンライン・ハラスメントに直面しても告発を支持してくれる人々がいれば、安心感が高まります。」

24歳、ペルー

彼女たちのコメントの根底には、ソーシャルメディア企業がハラスメント防止にあまり関心がないという思いがある。

「コメント監視の問題は、「私たちはとても慎重で、X、Y、Zを監視しています」と言いながら、実際にはまったくそうしていないことだと思います…誰かが通報した場合、ロボットではなく実際に人間が報告をきちんとチェックするべきです…だってロボットは個人攻撃を識別できないんですから。」

17歳、カナダ

全体的に見て、オンライン上のジェンダーに基づくハラスメントを減らすには、プラットフォームの所有者がもっと注意を払う必要がある。ある若い女性は、女の子と若年女性たちが嫌がらせについて抗議すると、彼女たちへのハラスメントがエスカレートすることが多く、ソーシャルメディア企業にその気があれば、この点に焦点を当てることができると指摘した。

「セクシャルハラスメントのような、タブー視されている、難しいことについて啓発するアカウントに特に焦点を当てるべきだと思います…割と広い自分のネットワークでも、セクシャルハラスメントについて啓発している人の方が、オンライン上でハラスメントを受けやすいです。セクシャルハラスメント被害を伝えるという重要な仕事をしているアカウントに焦点を当てた対策をとるべきだと思います。」

23歳、アメリカ

インタビュー回答者らが受けた苦い経験からくる実践的な提案は、ソーシャルメディア企業、法律、国家、市民社会に向けたものだ。女の子と若年女性たちは、一人ひとりが責任を負うことを快く受け入れ、ソーシャルメディア利用者個人、そして女性一般、特に活動家の役割を強調することが多いが、女の子と若年女性たちのオンライン上の安全を本当に支えるべきなのは、こうした大きな組織なのだ。ハラスメントの防止・通用に関連する技術が整備されていなければ、加害者の責任を問う法律がなければ、適切な情報と意識がなければ、個人の行動や女性のエンパワーメントだけでは、どうすることもできない。社会が変わること。一刻を争う喫緊の課題である。

プログラムと実践

1. フィリピンのサイバーセーフティプロジェクト「Know That There is Help」

プランがフィリピンで展開しているCyber Safe Spacesプロジェクトは、オンライン・ハラスメントと虐待のもっとも悪質な側面に焦点を当て、多次元的アプローチを用いてオンライン上の子どもの性的虐待と搾取と闘う取り組みだ。このプロジェクトは、若者たちが自分の安全を守ることができるように能力開発と教育を行い、両親、社会サービス提供者、教師、自治体職員に対する教育も行いながら、オンライン上の性的虐待と搾取の被害者となった若者たちへのサポートを行っている。

Cyber Safe Spacesプロジェクトは、ピア・エデュケーションの手法を取り入れ、デジタルに関する知識と何が虐待や搾取にあたるのか正しい認識を広める活動の担い手として若者を養成する。こうした担い手たちは性と生殖に関する健康について学び、ソーシャルメディアキャンペーンにも参加している。

12歳のJennyは、マニラのユース支援グループのメンバーとして活躍している。彼女は他の若者たちに、虐待に注意し、あれば通報し、決して被害者が悪いのではないことを理解するよう働きかけている。そして、**「必要なのは、心を開くこと、悪意をソーシャルメディアで共有しないと決意すること、そして、助けがあることを知る」**ことだと彼女は言う。

このプロジェクトは、サイバーに関する若者を対象とした意識喚起講習会を開き、ヘルプラインを再稼働し、国や地元当局と協力して、子どもの安全を守るための政策策定と法律施行に取り組んでいる。子どもの性的搾取に取り組む関係者全員が効果的に連携できるよう、ソーシャルワーカー、医療従事者、警察官などの専門家チームが再編成・強化された。オンライン上の通報メカニズムが確立され、チーム、ピアサポートグループ、コミュニティといったさまざまな参加者が被害者を安全に通報・照会できるよう、手順が策定・更新された。

このプロジェクトを実施するために、プラン・インターナショナル・フィリピンは、学校、地元当局、テクノロジー企業、インターネットカフェ、その他のキャンペーングループなど、数多くのさまざまなパートナー団体と協力し、危険にさらされている大勢の若者とその親・保護者に支援を行っている。

プランのフィリピンでの活動はデジタルを中心に実施されている。AFacebookとパートナーシップを結んでいるDigital Tayo Platformは、デジタル世界のスキルを身につけるためのアクセス可能な学習モジュールとリソースを提供し、フィリピンのデジタルコミュニティの形成を後押ししている。2019年には、Facebook、Microsoft、政府の情報通信技術担当局と連携してCyber Telenor Youth Summitを開催。500人の若者がオンライン上の安全性について議論した。同年4月には、フィリピン政府がオンライン上とオフラインの空間におけるセクシャルハラスメントを罰する新法を可決し、チームは現在、その施行に向けて政府と緊密に連携している。次のステップとして、フィリピン女性委員会と提携し、オンライン上の女の子の安全性向上を含む全国キャンペーンを実施する。

Cyber Safe Spacesプロジェクトやその他のデジタル・プログラムを実施した経験から、インターネット上の安全はテクノロジーだけの問題ではないことがわかる。同時にそれは、子ども、大人、そしてコミュニティ全体がインターネットを利用する際の行動を変えることでもある。技術的な解決策も必要だが、各組織が行動変容の取り組みを支援し、（インターネットで）つながったこの世界で被害を受けやすい子どもたちが直面するリスクに取り組むことも、引き続き必要である。行動変容は時間がかかるため、出資者と資金提供者は、もっと長期にわたる、より現実的な資金サイクルに着手する必要がある。

2. 太平洋地域におけるプラン・インターナショナル・パートナーシップ：オンライン上の安全強化に向けたデジタル・リテラシー・プロジェクト

プラン・インターナショナル・オーストラリアとChildFund Australiaは、ウェスタン・シドニー大学のYoung and Resilient Research Centreと共同で、ソロモン諸島、キリバス、パプアニューギニアにおける子どものテクノロジー利用がもたらす課題と機会を把握する調査に現在取り組んでいるところだ。

調査結果は、2020年7月から2年間のソロモン諸島におけるオンライン・セーフティプロジェクトの設計に現在活用されているが、このプロジェクトは、若者、親、コミュニティが知識とスキルを身に着け、子どもと若者の権利を尊重・促進するオンライン上の安全の構築にジェンダーの視点に立った若者主導のアプローチを推進するものだ。Tこのプロジェクトは、プラン・インターナショナル・オーストラリア、ChildFund Australia、オーストラリア外務貿易省のサイバー協力プログラムによって共同出資されている。

「若い女の子は男性や男の子の標的になりやすいので、女の子の方がこうした問題のリスクにさらされていると、個人的には思います。」

12歳、ソロモン諸島

子どものインターネットへのアクセスが増加するにつれてオンライン上のリスクは高まるが、これは、オンライン上の性的虐待やいじめなど複雑な問題に取り組むためのリソースと能力の乏しい低所得国で特に顕著だ。オンライン上の安全性は、この10年間に携帯電話技術が急速に拡大した太平洋地域で特に懸念されるが、オーストラリア、ソロモン諸島、パプアニューギニアを結ぶCoral Sea Cableシステムなど、オーストラリア政府のインフラプロジェクトによってこの拡大はさらに加速化すると見られている。ケーブルインターネットシステムが太平洋地域全域で展開され、この地域で安価で高速なデジタル接続が可能になれば、ソロモン諸島、キリバス、パプアニューギニアなどの国々の子どもたちにかつてない機会がもたらされる一方で、新たな危害のリスクにさらされる恐れがある。

「リスクは防げるが、子どもの能力を超えてしまうと、それを防げなくなる。」

16歳、キリバス

調査から、女の子がオンライン上で被害に遭う可能性は男の子に比べてはるかに高いことが明らかになり、これに対する親の一般的な反応は、女の子のアクセスをブロックするというものだ。これは、オンライン上の安全対策を利用するための知識とスキルが親自身にないためだ。こうしたスキルを学ぶことは、コミュニティのすべてのメンバーにとってきわめて重要なのだ。そして、このプロジェクトでは、大人と子どもの両方と協力して、インターネットへのアクセスとそれによって得られる機会がすべて安全で、あらゆる多様性を持つ若者たちが平等に利用できるものにする。

「親が危険だからと、携帯電話を使わせてくれません。」

14歳、ソロモン諸島

プロジェクトの主な目的は以下の通り。

- ユース主導のオンライン上の安全リテラシー・トレーニングを実施することで、リスクを最小限に抑えつつ、若者がデジタル・リテラシーのメリットを実感できるようにすること。
- 世代を超えたトレーニングカリキュラムを提供することで、オンライン上の安全を守るうえで必要な知識とスキルを保護者に身につけさせる。
- 若者にとって安全なオンライン環境を確立するための政策と手続き上の基準の策定に、コミュニティの主要団体を参加させる。
- 安全性の高いオンライン環境づくりに向けて分野をまたいだ連携がすすむよう、警察、政府、オーストラリア連邦警察のCyber-Safety Pasfika啓発プログラムと若者との協力を促進する。

3. Women of Uganda Network:[31] 技術活用の推進と人権保護

Women of Uganda Network (WOUGNET)は、ウガンダの女性および女性組織によるICT利用の促進・支援を使命とするNGOである。主な目的は、女の子と女性によるインターネットへのアクセスと利用といったテクノロジー活用の促進だが、デジタル世界における彼女たちの人権が法律によって確実に保護されるための取り組みも進めている。いくつかの研究によると、女の子と女性のインターネットへのアクセスと利用を阻む要因のひとつはオンライン上の暴力であり、このため、こうした虐待との戦いが組織の優先事項となっている。

2018年、WOUGNETは、テクノロジーに関連した女性への暴力に関する調査を実施し、そこで得た情報を基に女性と女の子に対するオンライン上の暴力について一般の意識を喚起するキャンペーンを、ウガンダの高校、大学、その他の組織で展開した。この調査の結果、一般的に「リベンジポルノ」として知られるジェンダーに基づく暴力の一形態である「合意なしに性的画像を公表する行為（NCII）」が増加していることがわかった。WOUGNETは現在、ハッシュタグ#AskforConsentを付けたキャンペーンを展開中で、NCIIに対する意識喚起とともに、NCIIをめぐるウガンダの政策環境を変えるために、反ポルノ法2014の変更を求める提言を行っている。

さらに、WOUGNETはTake Back Techの資金援助を受けて、「ウガンダにおける女性の権利オンラインメディア」キャンペーンも実施している。同組織は、女性に対する暴力、特に女性と女の子に対するオンライン上の暴力について、国連特別報告官にCOVID-19状況下での家庭内暴力に関する提案を行う一方で、オンライン上の女性の権利に関するWeb Foundation 2016の調査に参加。現在は、ジェンダーの視点がしっかりと組み込まれているかを確認するためにICTやインターネット政策の分析とともに、オンライン上の暴力に関する幅広い執筆活動を行っている。調査を行う際にはジェンダー評価手法のアプローチを取り入れ、確実にジェンダーの視点が組み込まれるようにしている。

WOUGNETは、さまざまなソーシャルメディア・プラットフォームを使って情報を共有し、オンライン上の女性の権利を主張し、東部と北部ウガンダに情報センターを開設して、女性と若者が関連情報にアクセスできるようにした。また、活動地域にあるコミュニティとともにICTとデジタルセキュリティの訓練を行い、ICTの利用頻度がもっとも高くオンライン上で脅迫やハラスメントの標的にされやすい若者たちが、自分の身を守る方法を学べるよう取り組んでいる。

オンライン上のジェンダーに基づく暴力の撲滅に向けて活動している多くの女の子・女性の権利団体の取り組みがきわめて重要であることは、プランも認めるところである。以下、団体名。

Association for Progressive Communication (APC) – www.apc.org; Internet Society – www.internetsociety.org ; Glitch – https://fixtheglitch.org/; Luchadoras – https://luchadoras.mx/; Pen America – https://pen.org/; Internews – https://internews.org/; European Women's Lobby – https://womenlobby.org/; Minas Programme – https://minasprogramam.com/ ;African Feminism – https://africanfeminism.com/; Digital Society of Africa – www.digitalsociety.africa ; Feminist Internet – https://feministinternet.org/



結論

この調査により、オンライン上のハラスメントが単に「女の子だから」という理由で発生していることが明らかになった。女の子たちは、弱い立場にあると見られ、自信も知識もないことが多いために攻撃対象になりやすい。黒人である、民族・宗教上の少数派である、障害者である、LGBTIQ+であることを明らかにしている、あるいは、特にフェミニズムや権利の平等について率直な意見を述べると、さらなるハラスメントを受けることになる。オンライン・ハラスメントは、他のさまざまな場所で女の子と若年女性に起きていることと地続きの問題なのだ。発生する場所がどこであれ、社会に人を平等に評価する力がないことが、ハラスメントとジェンダーに基づく暴力の根本原因である。女の子と若年女性たちは、街中や家庭、学校、職場で自分の身に起きることと、オンライン・ハラスメントはつながっていることを強く意識している。

「公共の場やオンライン上での性暴力がない方がいい。女性には自由を感じる権利があり、オンライン上あるいは公共の場での暴力から解放される権利があると思うからです。」

19歳、インドネシア

彼女たちには、自分のアイデンティティや装い、発言を理由にストーカー行為を受け、貶され、脅迫されるといった虐待でオンライン上の自由を決して制限させないという決意と、闘う目的に対する情熱、そして驚くほどのレジリエンス（回復力）がある。しかし、中には、それがあまりにも大きな負担になる場合もある。

調査では、オンライン・ハラスメントを受けた女の子のうち、5人に1人（19%）が、ハラスメントを受けた後、ソーシャルメディア・プラットフォームの利用をやめたか、大幅に減らしたという結果が出ている。

オンライン・ハラスメントは、ストリートハラスメントに比べ、その場で目に見えにくいものなので、親や当局は何が起きているのか把握・理解できないことが多い。この点が十分真剣に受け止められておらず、女の子と若年女性が一人で対処せざるを得ない実態を生んでいる。ソーシャルメディア上の虐待は、女の子の権利に対する攻撃であり、女の子の精神衛生に有害な影響を及ぼし、これに取り組まない限り、ジェンダー平等は夢のまた夢である。ソーシャルメディアは単なる言葉によるハラスメントが行われる（現実とは）別の仮想世界だと簡単に片づけることはできない。それは、あまりにも多くの女の子と若年女性たちにとって、恐ろしいほど脆弱な、虐待の場となっている。

女の子と若年女性たちは、ソーシャルメディア企業、政府、市民社会組織、他のソーシャルメディアユーザーに行動を求めている。彼女たちの声に耳を傾けなくてはならない。だが、彼女たちを一括りにすることはできず、彼女たちがオンライン上で安全で自由に活動できるようにするためには、それぞれの国、社会、そしてオンライン空間で、数多くのさまざまな戦略が必要だ。

21世紀において、ソーシャルメディアは日常生活の一部となっており、オンラインへのアクセスとデジタル空間の増加により、参加し、交流し、情報を得る機会はかつてないほど広がっている。こうした空間は、誰にとっても安全でアクセスしやすいものでなければならないが、現実は異なることがこの調査から明らかである。オンライン・ハラスメントの行為者たちは政府やテクノロジー企業に規制されることもなく、女の子たちの権利を制限し、多くの場合恐怖を与え、もっとも脆弱な者から活動の場を奪っている。

オンライン・ハラスメントの加害者、そして彼らに活動の場を与えているプラットフォームが法の適用を受けず、その一方で女の子の権利とジェンダー平等の障壁となることなど、決してあってはならない。



この報告書が執筆されている間も当然ながら、アメリカをはじめ世界中で、反黒人人種主義との闘いへの注目は高まっている。黒人の命を守る運動は、すべてではないにせよ多くの社会の制度や行動にある組織的でしばしば暴力的な反黒人人種主義の存在を認め、それに対して行動を起こすよう私たち一人ひとりに求めている。

本報告書の調査を通して、オンライン上であれオフラインであれ、若年女性たちは交差性のある数多くの特質とアイデンティティを理由にハラスメントと暴力を受けていることがわかった。報告書では、女の子と若年女性たちが、自分たちがハラスメントを受ける多様で複合的な理由について話している。若くて、女性であることに加え、黒人であるために、若い黒人女性は、モノ扱いされ、中傷されている。

「みんな人種について話したがらないです」という若い女性のコメントに対して、別の女性は、自分がどういうステレオタイプ（固定概念）にはめられているかを説明した：「アフリカ系のペルー人女性は性欲が強いと思われているので、個人的な写真をあまり投稿しなくなりました。」

人種差別は、場所によって異なる形で現れるが、常に存在する。だからそれを認め、闘わなければならない。プランは「ブラック・ライブズ・マター」の運動に共感し、抗議の声を上げるあらゆる多様性を持つ黒人の女の子と女性の活動家、そして人種的暴力と不公正に対して組織化し行動を起こしている同志たちと連帯している。人種的正義は、女の子の正義の重要かつ決定的な要素だ：黒人の女の子の平等を達成することなく、女の子のための平等を達成することはできない。

提言

すべての女の子と若年女性に対するオンライン・ハラスメントと暴力が、どのような形で現れたとしても、その存在を認め対処するうえで、誰もが果たすべき役割を担っている。以下の提言は、女の子や若い女性たちが私たちに語ったことに基づいており、私たち全員が関与している。女の子と若年女性たちの声を基に作成された以下の提言は、私たち一人ひとりの問題である。



ソーシャルメディア企業

ソーシャルメディア企業がすべきこと

- オンライン上のジェンダーに基づく暴力に特化した、**より強力で効果的かつアクセスしやすい通報メカニズムを構築して**、加害者の責任を追及し、アイデンティティの交差性に配慮しながらすべての女の子のニーズと体験に対応できるようにする。
- 国連「ビジネスと人権に関する指導原則」に沿って、人権を尊重する企業責任を**果たす**。
- 世界中のあらゆる多様性を持つ女の子と若年女性たちと**協力して**政策的・技術的解決策を生み出し、ソーシャルメディア・プラットフォームにおけるジェンダーに基づくハラスメントと暴力に対処し、それを防止する。
- ジェンダーに基づく暴力をタイムリーに特定・削除するために、コンテンツのチェックを**強化・改善**するとともに、必ず平等性・バランス・透明性のあるアプローチで全世界のコンテンツ・チェックを行う。
- 他のプラットフォーム規定違反と同様に、加害者へのタイムリーな制裁を含めて、ジェンダーに基づくオンライン・ハラスメントの**加害者の責任を問う**。
- ソーシャルメディアユーザーの間でジェンダーに基づくオンライン・ハラスメントをテーマにした議論を開始し、意識向上に向けた信頼性の高い関連情報の提供とすべてのユーザーを対象にしたデジタル・シティズンシップ教育の実施により、すべての多様性が認められた女の子と若年女性にとって安全なオンライン環境を作る**責任を持つ**。
- 女性と女の子に対するオンライン・ハラスメントと暴力、ジェンダーによる情報格差の規模、範囲、測定結果、特質をしっかりと把握・理解するために、民間団体や市民社会と連携して性別・年齢別の細分化されたデータを**収集し、公表する**。

「SNSを運営する企業は課題解決そのものにお金を投資していませんが、積極的にコメントを監視するための人員配置ができるように、もっと運営にお金をかけるべきだと思います。」

17歳、カナダ

国際的・地域的な人権立法者とその他の政府間の取り組み

国際社会がすべきこと

- デジタル環境に関連した子どもの権利に関する一般的意見第25号の草案がオンライン・ハラスメントにさらに目を向け、必ずジェンダー、年齢、多様性に配慮したアプローチで作成されるよう、子どもの権利委員会に**求める**。
- 国境と管轄権を理由にした刑事免責を防ぎ、法的な相互支援を促進するため、国連その他の国際機関と**協力して**、子どもと女性を含むあらゆる利用者に対するオンライン上の暴力に関する法律と基準の収集と総合的な調整を行う。

各国政府

以下のような法律と政策を採用しなければならない

- インターネットアクセスに関する政府の政策が、オンライン空間へのアクセスにおいてジェンダー平等を積極的に推進する包摂的な内容になるようにする。これには、接続性の向上とモバイルインターネットアクセスの実現に向けたモバイルネットワーク環境の整備も含まれる。
- 特に人種、年齢、障害、民族、LGBTIQ+など、アイデンティティの交差性を念頭に置いて、すべての女の子と若年女性に対するオンライン・ハラスメントと暴力に対処できるよう、法的枠組みを**更新**・改善する。
- ソーシャルメディア・プラットフォームその他第三者的なインターネットプラットフォームの責任を追及できるよう、女の子と女性に対する暴力に対処する革新的な法律を**制定する**。
- すべての女性と女の子に対するオンライン・ハラスメントとオンライン上の暴力に対処する法律と政策が、警察、司法、検察など関連するすべての政府部門によって効果的に実施されるようにする。
- 通報メカニズムの認知促進、法執行機関と司法官の訓練、ヘルプラインの設置などによって、オンライン・ハラスメントと暴力の標的になった女の子と若年女性の司法へのアクセスを**確保する**。
- 女の子と若年女性の具体的な要望を理解し、適切な法律と政策を制定するために、女の子と若年女性の**意見を聞く**。

適切な教育・啓発の実施：

- 教育担当部署がオンライン上の安全に関するデジタルカリキュラムを開発・提供することを**義務付け**、生徒が女性と女の子に対するオンライン・ハラスメントや暴力を把握し、回避・防止するスキルを身につけ、通報メカニズムを利用できるようにする。
- 女の子に対するオンライン暴力のリスクと、関連する犯罪の捜査と訴追を含むオンライン・ハラスメントの通報の管理方法について、政府関係者対象の**研修を実施する**。

公衆衛生キャンペーンの確立

- 交差性に重点を置いた、オンライン上のジェンダーに基づく暴力に関する細分化されたデータの収集・公開など、オンライン・ハラスメントが精神的・身体的健康に与える影響について、より広くコミュニティへの**情報提供を行う**。
- 女の子を中心に、その家族とコミュニティに対して、啓発活動に加え、心の健康とセルフケアに重点を置いたヘルプラインなどの幅広い支援サービスを提供するために、官民一体となった取り組みをすすめる。

「ひとつだけ、本当にお願いしたいのは、もし、私たちを支援できるのであれば…法律をつくってください。」

23歳、南スーダン

コミュニティ、家族、市民社会、信仰に基づく組織、その他関係者がすべきこと

- **コミュニティと家族**は、女の子がオンライン・ハラスメントについて安心して話すことができ、支えてくれる人がいることを自覚できるよう対策を講じなければならない。
- コミュニティ、家族、市民社会がオンライン上にある機会だけでなく、リスクについても知識を深められるよう、**市民社会**はオンライン上の虐待に焦点をあてたデジタル・シティズンシップ教育と意識改革の取り組みを開発・実施する必要がある。
- **NGO**は、ジェンダー不平等、有害なジェンダー規範、女性と女の子に対する暴力の撲滅を目指して、オンライン・ハラスメントと暴力の問題についてより広い議論を働きかけなければならない。
- **通信キャリア事業者**は、モバイルインターネットアクセスをより包摂的なものにするための措置を講じる必要があり、特に教育と健康関連の情報とコンテンツに自由にアクセスできるようにするとともに、データ許容量の増加とコストの引き下げに重点を置く。
- **社会に生きる**一人ひとりが、女の子と女性に対するオンライン・ハラスメントと暴力がもたらす害を認識し、彼女たちとの連帯感を持って、虐待を通報し女の子の声を広める役割を積極的に果たさなくてはならない。

「誰が行動を起こすべきか?それはすべての人たちです。私たち自身から始め、次にSNSを利用する人々、そしてSNS運営企業自体も行動を起こしてほしい。」

19歳、インドネシア



巻末資料

1 Hinson, L., Mueller, J., O'Brien-Milne, L., & Wandera, N. (2018). Technology-Facilitated GBV: What is it, and How do we measure it? International Center for Research on Women. Retrieved from https://www.icrw.org/publications/technology-facilitated-genderbased-violence-what-is-it-and-how-do-we-measure-it/

2 https://www.vanityfair.com/news/2018/07/the-man-who-created-the-world-wide-web-has-some-regrets

3 https://www.theguardian.com/technology/2019/mar/12/tim-berners-lee-on-30-years-of-the-web-if-we-dream-a-little-we-can-get-the-web-we-want

4 Lam, A. 17 April 2018. 87% of Germans Approve of Social Media Regulation Law accessed at https://daliaresearch.com/blog/blog-germans-approve-of-social-media-regulation-law/ on 18 June 2020.

5 BMJV (2020) Gesetzespaket gegen Hass und Hetze ist ein Gesetzespaket zum Schutz der Demokratie accessed at https://www.bmjv.de/SharedDocs/Artikel/DE/2020/061820_GesetzHassundHetze.html on 14 July 2020; Tagesschau (2020) Gesetze gegen Hass im Netz accessed at https://www.tagesschau.de/inland/internet-hass-hetze-101.html on 14th July 2020;

Lomas. N. (2020) Germany tightens online hate speech rules to make platforms send reports straight to the feds accessed at https://techcrunch.com/2020/06/19/germany-tightens-online-hate-speech-rules-to-make-platforms-send-reports-straight-to-the-feds/?guccounter=1 on 14th July 2020

6 Oltermann, P. 5 January 2018. Tough new German law puts tech firms and free speech in spotlight accessed at https://www.theguardian.com/world/2018/jan/05/tough-new-german-law-puts-tech-firms-and-free-speech-in-spotlight on 18 June 2020.

7 World Wide Web Foundation.(2014) 'Digital Media and Children's Rights: Safeguarding Human Rights Online' accessed at https://www.ohchr.org/Documents/HRBodies/CRC/Discussions/2014/WorldWideWebFoundation-AssociationforProgressiveCommunications-CJCP.pdf on 3 June 2020.

8 The Broadband Commission (2019) State of Broadband Report 2019: International Telecommunication Union and United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization, accessed at https://www.itu.int/dms_pub/itu-s/opb/pol/S-POL-BROADBAND.20-2019-PDF-E.pdf on 7 July 2020

9 www.statista.com/statistics/725778/countries-with-the-lowest-internet-penetration-rate/ accessed 27 July 2020

10 参照：https://www.statista.com/statistics/617136/digital-population-worldwide accessed on 13 May 2020.

11 Livingstone, S. (2019) 'Rethinking the rights of children for the digital age'LSE Impact Blog accessed at https://blogs.lse.ac.uk/medialse/2019/03/18/rethinking-the-rights-of-children-for-the-internet-age/ on 3 June 2020.

12 UN Committee on the Rights of the Child. Annex III from Day of General Discussion: "Digital media and children's rights" accessed at https://www.ohchr.org/en/hrbodies/crc/pages/discussion2014.aspx on 3 June 2020.

13 Para 20.

14 Para 29.

15 Para 30.

16 A online repository of laws can be found on the webpage of the United Nations Conference on Trade and Development at https://unctad.org/en/Pages/DTL/STI_and_ICTs/ICT4D-Legislation/eCom-Global-Legislation.aspx accessed on 6 June 2020.

17 The Broadband Commission for Digital Development (2015) Cyberviolence Against Women and Girls: A World-WideWake-Up Call accessed at https://www.broadbandcommission.org/publications/Pages/bb-and-gender-2015.aspx on 3 December 2019

18 Lumsden, K and Morgan, H.M. (2017) 'Cyber-Trolling as Symbolic Violence: Deconstructing Gendered Abuse Online'. In N. Lombard (ed) The Routledge Handbook of Gender and Violence. London. Routledge.

19 The World Wide Web Foundation, 12 March 2020. The online crisis facing women and girls threatens global progress on gender equality accessed at https://webfoundation.org/2020/03/the-online-crisis-facing-women-and-girls-threatens-global-progress-on-gender-equality/ on 9 June 2020.

20 インターネットを利用して、個人または組織に関する個人情報または識別情報（特に個人を特定できる情報）を調査し、公に流す行為。

21 Amnesty International (2018) Toxic Twitter – A Toxic Place for Women accessed at https://www.amnesty.org/en/latest/research/2018/03/online-violence-against-women-chapter-1/ on 3 December 2019.

22 Vickery, JR and Everbach T (2018) The Persistence of Misogyny: From the Streets, to Our Screens, to the White House in Vickery and Everbach (Eds) Mediating Misogyny: Gender, Technology, and Harassment, Palgrave McMillan accessed at https://www.researchgate.net/profile/Paromita_Pain/publication/323146855_NastyWomen_Reclaiming_the_Twitterverse_from_Misogyny/links/5abbc1b20f7e9bfc045592c9/NastyWomen-Reclaiming-the-Twitterverse-from-Misogyny.pdf on 3 December 2019.

23 The Broadband Commission for Digital Development (2015) Cyberviolence Against Women and Girls: A World-WideWake-Up Call accessed at https://www.broadbandcommission.org/publications/Pages/bb-and-gender-2015.aspx on 3 December 2019.

24 LawyersWeekly, 8 March 2018. Firm pushes for platforms like Facebook to be held responsible for cyber bullying accessed at https://www.lawyersweekly.com.au/sme-law/22872-firm-pushes-for-platforms-like-facebook-to-be-held-responsible-for-cyber-bullying on 10 June 2020 and Engineering and Technology, 24 June 2019. Tech bosses must be accountable for online child abuse, says NSPCC head. Accessed at https://eandt.theiet.org/content/articles/2019/06/tech-bosses-must-be-accountable-for-online-child-abuse-says-nspcc-head/ on 10 June 2019.

25 Marketwatch, 17 July 2019. Instagram, Facebook and Twitter struggle to contain the epidemic in online bullying https://www.marketwatch.com/story/why-it-may-be-too-late-for-instagram-facebook-and-twitter-to-contain-the-epidemic-in-online-bullying-2019-07-15 and The Guardian, 9 February 2016. What are four of the top social media networks doing to protect children? https://www.theguardian.com/sustainable-business/2016/feb/09/social-media-networks-child-protection-policies-facebook-twitter-instagram-snapchat Both accessed at on 9 June 2020.

26 Safety Net Report: Impact of Cyberbullying on Children's Mental Health accessed at https://youngminds.org.uk/resources/policy-reports/cyberbullying-inquiry/#about-the-inquiry- on 9 June 2020.

27 https://data.em2030.org

28 https://www.digitalgendergaps.org

29 Eurostat, April 2020.

30 この比率には、自身がハラスメントに直面したことがある女の子と、自身はその種のハラスメントに直面していないが、直面した女の子や若い女性を知っている女の子が含まれていることに注目することが重要である。

31 https://wougnet.org/

プラン・インターナショナルは、女の子が本来持つ力を引き出すことで地域社会に前向きな変化をもたらし、世界が直面している課題の解決に取り組む国際NGOである。世界75カ国以上で活動しており、世界規模のネットワークと長年の経験に基づく豊富な知見で、弱い立場に置かれがちな女の子が尊重され、自分の人生を主体的に選択することができる世界の実現に取り組んでいる。

Girls Get Equal: プラン・インターナショナルは、10年超にわたって女の子の権利のためのキャンペーンを行ってきた。現在のGirls Get Equalキャンペーンは、女の子とユース女性が自らの人生に対する力を持ち、周囲の世界を形作る手助けができるようにすることを目的としている。ユース女性のリーダーシップを促進することが、Girls Get Equalキャンペーンの中核をなす。これには、公的な場で意思決定を行うユース女性や女の子の数を増やすなど、正式な権力や権威のある地位へのアクセスも含まれるが、それ以上のことも視野に入れている。このキャンペーンは、女の子、ユース女性、ユースアドボケート、活動家がどのようにリーダーになることを選ぶかをよりよく反映するために、リーダーシップを再定義しようとするもので、リーダーシップがフェミニスト、ジェンダー・トランスフォーマティブ、包摂的であるように、彼女たちと共に取り組んでいる。これは、男性が定義した狭い範囲のリーダーシップのスキルや行動を強化したり、現在存在する男性優位の権力やリーダーシップの構造を複製したりしないことを意味する。キャンペーン期間中、女の子やユース女性とパートナーを組み、彼女たちにとってリーダーであることの意味を十分に理解するための継続的な調査が行われる。

Plan International
Global Hub

Dukes Court, Duke Street, Woking,
Surrey GU21 5BH, United Kingdom

Tel: +44 (0) 1483 755155
Fax: +44 (0) 1483 756505
E-mail: info@plan-international.org

plan-international.org

Published in 2020

facebook.com/planinternational
twitter.com/planglobal
instagram.com/planinternational
linkedin.com/company/plan-international
youtube.com/user/planinternationaltv